

假名手本忠臣藏

假名手本忠臣蔵

第

一

地嘉有といへども食せざれば其味をしらずとは。國治てよき武士の忠も武勇も隠るゝに。例へば星の晝見へず夜は亂れて顯はるゝ。例を爰に假名書の「オロシ」太平の代の政。地比は曆應元年二月下旬。足利將軍尊氏公。新田義貞を討亡し。京都に御所を構徳風四方に普く。萬民草の如くにて靡從ふ御威勢。地國に羽を伸す鶴が岡八幡宮御造營成就し。御代參として御舍弟足利左兵衛督直義公。鎌倉に下着なりければ。在鎌倉の執事高武藏守師直。御膝元に人を見下す權柄眼。御馳走の役人は。桃井播磨守が弟若狹助安近。伯州の城主鹽冶判官高定。馬場先に幕打廻し。フシ威儀を正して相詰る。地直義仰出さるゝは。いかに師直。此唐櫃に入置しは。兄尊氏に亡されし新田義貞。後醍醐の天皇より給はつて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流。着捨の兜といひながら。其儘にも打置れず。地當社の御藏に納る條其心得有べしとの嚴命なりと宣へば。武藏守承り。詞は思ひも寄ざる御事。新田が清和の未なり迎着せし兜を尊敬せば。御旗下の大小名清和源氏はいくらも有。地奉納の儀然るべからず候と。遠慮なく言上す。詞イヤ左様にては候まじ。此若狹助が存るは。是は全く尊氏公の御計略。新田の徒黨の討滅され御仁徳を感心し。攻ずして降参さする御方便と存奉れば。無用との御評議率爾也と。地言せも果す。詞イヤ師直に向て率爾とは出過たり。義貞討死したる時は大わらは。死骸の傍に落散たる兜の數は四十七。どれがどふ共見しらぬ兜。左様で有ふと思ふのを。奉納した其跡をそふでなければ大きな恥。生若輩な形をして御尋もなき評議。地引込て御居やれと御前好まゝ出る儘に。杭共思はぬ詞の大槌。打込れて迫立色目鹽冶引取て。詞コハ御尤成る御評議ながら。桃

井殿の申さるゝも、治代の軍法。地是以て捨てられず、雙方全き直義公の御賢慮仰奉る。申上れば御機嫌有。調ホ、左言んと思ひし故。所存有て鹽治が婦妻を召連よと言付し。是へ招けと有ければ。地はつと答の程もなく。馬場の白砂、跌徒にて。裾庭掃掃掃。地神の御前の玉簪玉を欺く薄化粧。鹽治が妻のかほよ御前。フシ遙か下つて畏る。地女好の師直其儘聲懸。詞鹽治殿の御内室かほよ殿。最前より應待遠御太義。地御前の御召近ふくと取持顔。直義御鑑じ。詞召出す事外ならず。往元弘の亂に。後醍醐帝都にて召れし宛を。義貞に給はつたれは。最期の時に着つらん事疑はなけれ共。其宛を誰有て見し人外になし。其比は鹽治が妻。十二の内侍の其内にて。兵庫司の女官なりと聞及ぶ。無見知あらんず。覺あらば宛の本阿彌。地目利くと女には。嚴命さへも和らかに。フシ御受申も又。詞冥加に餘る君の仰。夫こそは私が。明暮手馴し御着の宛。義貞殿拜領にて。關客待といふ名香を添て給はる。御取次は則かほよ。其時の勅答には。人は一代名は未代。すは討死せん時。此關客待を思ふ儘。内宛に炷占着ならば。地鬢の髪に香を留て。名香薫る首取しといふ者あらば。義貞が最期と思召れよとの。詞はよもや違ふまじと申上たる口元に。下心有師直は。小鼻いからし聞居たる。地直義委く聞召。詞ヲ、詳なるかほよが返答。左あらんと思ひし故。落散たる宛四十七。此唐櫃に入置たり。地見分させよと御上意の下侍。屈る腰の海老鏡を。明る間違しと取出す。鈍ず臆せず立寄て。フシ見れば所も。名にし負ふ。鎌倉山の星兜。とつばい頭獅子頭。扱指物は家々の。フシ流義く寄ぞかし。地或は直平筋兜。鍔のなきは。弓の爲。其主々の好逆。數々多き其中にも。五枚兜の龍頭。是ぞと言ぬ其内に。ぱつと薫し名香は。かほよが馴し義貞の宛にて御座候とフシ指出せば。地左様ならめと一決し。鹽治桃井兩人は。寶藏に納べし此方へ來れと御座を立。かほよに御暇給はつて段かづらを過給へば。鹽治桃井兩人も打通つてこそ入にける。地跡にかほよは附端なく。師直様は今暫し。御苦勞ながら御役目を。御仕舞有て御靜に。詞御暇の出た此かほよ。長居は恐れおさらばと。地立上る袖指寄てじつと控へ。詞コレまあお接待給へ。今日の

御用仕舞次第。其許へ推參して御目に掛る物が有。幸の好所召出された直義公は我爲の結ぶの神。御存の如く我等歌道に心を寄。吉田の兼好を師範と頼日々、の狀通。其許へ届けよと問合せの此書狀。いかにもとの御返事は。口上でも苦しいないと。地袂から袂へ入るゝ結び文。顔に似合ぬ様參る武藏鎧と書たるを。見るよりはつと思へ共。はしたなう恥しめては。却て夫の名の出る事。持歸つて夫に見せふか。いや／＼夫では鹽冶殿。憎しと思ふ心から怪我過にもならふかと。フシ物をも言はず投返す。人に見せじと手に取上。調展すさへ手に觸たりと思ふにぞ。我文ながら捨も置れず。くどうは云ぬ好返事聞までは。口説て／＼口説拔。天下を立ふと伏せふ共儘な師直。鹽冶を生ふと殺合す若狭助。例の非道と見て取る氣轉。詞かほよ殿まだ退出なされぬか。御暇出て隙取るは。地却て上への恐れフシ早御歸りと迫立れば。地彼奴擬はけどりしと。弱みを喰はぬ高師直。詞ヤア又しても言れぬ出過。立て宜ければ身が立ず。此度の御役目。首尾能う勤させくれよと。鹽冶が内證かほよの頼み。左様なくて叶はぬ筈。大名でさへあの通。小身者に拾知行誰が影で取る。師直が口一ツで五器提ふも知れぬ危険い身代。夫でも武士と思ふじや迄と。地邪魔の返報憎體口。くわつと躁立若狭助。刀の鯉口碎る程。握り詰は詰たれ共。神前なり御前なりと。一旦の堪忍も。今一言が生死の詞の先手還御ぞと。御先を拂ふ聲々に。詮方なくも期を延す。無念は胸に忘れられず。悪事悖て運強く。切れぬ高師直を。翌の我身の敵とも。知らぬ鹽冶が跡押。直義公は悠々と歩御成たまふ御威勢。人の兜の龍頭御藏に入る數々も。四十七字のいろは分。假名の兜を和らげて。兜頭巾の綻びぬ國の掟ぞ。三重へ久方の

第

二

フシ空も彌生の。黄昏時。地桃井若狭助安近の。館の行義はき掃除。御庭の松も幾千代を。守る館の執權職。加古

川本藏行國。年も五十の分別盛。フシ上下ため付書院先。地歩行來るとも白洲の下人。調ナント關内。此間は御上にはてつからない御拵。都からの御客人。昨日は鶴が岡の八幡へ御社參。夥多しい御物入。ア、其銀の入目が欲しい。其銀が有たら此可介。名を改めて樂しむになア。何じや名を改めて樂しむとは珍らしい。そりや又何と替る。ハテ角助と改めて胴を取て見る氣。ナニ痴愚面な。汝等知らないか。昨鶴が岡で。是の旦那若狭助様。いかふ首尾で有たげな。仔細は知らぬが師直殿が。大きな恥を被せたと奴部屋の噂。定て又無理をぬかして。御旦那を迫詰。地おつたてあろフシとさがなき口々。調ヤイ。何を難々と喧しい御上の取沙汰。殊に御前の御病氣。御家の恥辱に成こと有ば。此本藏聞流し置べきや。禍は下部の嗜。掃除の役目仕廻たら。皆往け。地くと和らかに。女小姓が持出る。煙草輪を吐く雲を吐く。廊下音信ふ衣の香や。地本藏がほんざうの一人娘の小浪御寮。母のとなせ諸共にしとやかに立出れば。調是はく兩人共御前の御伽は申さいて。自身の遊びか不行義不萬。イエく今日は御前様殊の外御機嫌。今すやくと御休。夫てナア母様。イヤ申し本藏殿先程御前の御物語。昨日小浪が鶴が岡へ御代參の歸るさ。殿若狭助様。高師直殿。詞諍ひ遊ばせしとの御噂。誰が言ふとなく御耳に入。夫はくきつい御案じ。夫本藏仔細委敷知ながら。自に隠のかやと御尋遊ばす故。小浪に様子を尋ねれば。是も私と同じ事。地何にも様子は存じませぬとの御返事。御病氣の障御家の恥に成る事なら。調ア、これくとなせ。夫程の御返事なぞ取繕て申上げぬ。主人は生得御短慮なる御生れ付き。何の詞諍ひなどは。女わらべの口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより身を果すが刀の役目。武士の妻でないか。それ程の事に氣が付ぬか嗜めさく。ナニ娘。そちは又御代參の道すがら。左様の噂はなかりしか。但し有たか。ナニ無い。ヲ、其筈く。ハ、ハ、ハ、なんの別してもない事を。よし。奥方の御心休め。地直に御目に掛らんとフシ立上る折こそあれ。地當番の役人罷出。調大星由良之助様の御子息。大星力彌様御出なりと申上る。調ム、御客御馳走の申合せ。判官殿よりの御使ならん此方へ通せ。コレとなせ其方は御口上受取。殿

へ御通り申上られよ。御使者は力彌。娘小浪と言號の聲殿。御馳走申しやれ。地先奥方へ御對面と言捨。一間に入にける。地となせは娘を傍近くなふ小浪。調父様の堅くろしいは常なれど。今仰しやつた御口上。請取役は其方にと有そな所を。となせにとは母が心とは痛い違ひ。其許も又力彌殿の顔も見たかる。逢たかる。母に代て出向や。地いやかいやかと問返せば。應とも否とも返答は。ラシ潮紅顔のおぼこさよ。地母は娘の心を汲。アイタ、。娘背を押して給。是は何と遊ばせしと狼狽騒ば。調イヤ喃。今朝からの心遣ひ。又持病の癪が指込だ。是はどうも御使者に逢れぬ。アイタ、娘。太義ながら御口上も請取。御馳走も申て給。御主と持病に勝れぬ。地くと。徐々と立上り。地娘や。随分御馳走申しや。したが餘り馳走過。大事の口上忘れまいぞ。私も聲殿にアイタ。逢たからうの奥様は。フシ氣を通してぞ奥へ行。地小浪は御跡伏拜み。調忝い母様日比戀し床しい力彌様。逢は左言を右言をと。地娘心の悸々と。フシ胸に小浪を打寄る。地疊さはりも故實を糺し入來る大星力彌。まだ十七の角髪や。二つ巴の定紋にフシ大小立派爽に。地遺大星由良之助が子息と見へし其器量。徐々と座に直り。調たを御取次頼奉る。地と慇懃に相述る小浪ははつと手を突へ。確と見交す顔と顔。互の胸に戀人と。物も得言ぬ赤面は。梅と櫻の花相撲に。フシ枕の行司なかりける。地小浪漸胸押鎮め。調是は。御苦勞千萬に能こそ御出。只今の御口上請取役は私。御口上の趣を。御前の口から私が口へ。地直に仰しやつて下さりませと摺寄ば身を控へ。調ハア是は。不作法千萬。惣じて口上請取渡しは。行儀作法第一と。地疊を下り手を突へ。調主人鹽治判官より。若狭助様の御口上。明日は管領直義公へ未明より相詰申す筈の所。定て御客人も早々に御出あらん。然れば判官若狭助兩人は。正七ツ時に急度御前へ相詰よと師直様より。御仰。萬事間違のなき様に今一應御使者に參れと。主人判官申付候故右の仕合。此通若狭助様へ御申上下さるべしと。地水を流せる口上に。小浪は空然顔見とれ。フシ左右諸もなかりけり。地ヲ、聞た聞た便太義と若狭助。一間より立出。調昨日御別れ申てより。判官殿間違て御目にかゝらず。成程正七ツ時に貴意得

奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦勞千萬と。宜しく申傳へて呉られよ。御使者太義。然らば御申上ん。
 ナニ御取次おとりぎの女中御苦勞と。地徐々ちじうじう立て見向もせず。フシ衣紋えもん繕つくろひ立歸る。地本藏ほんざう一間より立代り。詞ハア殿どのは御入いり。彌明朝やみあけは。正七ツ時に御登城御苦勞千萬。今宵も最早九ツ。暫御間睡遊おまどろあそはされよ。成程なるほど。イヤ何本藏なんぼんざう。其方に些用事ちようじあり密々の事。小浪を興へく。ハアコリヤく娘むすめ。用事あらば手を拍たたふ興へく。地と娘を追遣おしやう。合點ごてんの行ぬ主人しゆじんの顔色かおいろと。御傍おそばへ立寄。詞先程より御伺おきこひ申さんと存せし所。委細具に御仰おほせ。地下さるべしと指寄さしやば。馳寄ちよ。詞本藏今此若狹助が言出す一言。何に寄す畏り奉ると二言を返さぬ誓言聞ふ。ハア是はく改つた御詞。畏り入奉るでは御座れども。武士の誓言はならぬと言のか。イヤ左にあらず。先委細篤と承はり。仔細を言せ。跡あとで異見か。イヤ夫は。詞を背くか。サア何と。地ハツ。地はつと計指空向かきさきむかフシ暫時詞なかりしが。地胸を極て指添さしぞ抜き。片手に刀拔出やたなひきだし。てうくと金打きんうちし。詞本藏が心底斯の通り。止めも致さず他言もせぬ。先思召の一通御急なされずと。本藏めが胃の腑に落付様にとつくりと承はらんと相述る。ム、一通り語て聞せん。此度管領足利左兵衛督直義公かみなほし。鶴が岡造營故。此鎌倉へ御下向。御馳走の役は鹽治判官。某兩人承はる所に。尊氏將軍よりの仰にて。高師直を御添人。萬事彼が下知に任せ御馳走申上よ。年配と言ひ諸事物馴たる侍と。御意に隨ひ勝に乗て日比の我儘十倍増わがままじふばいぞう。都の諸武士並居る中。若年の某を見込難言過言。眞二つにと思へ共。御上の仰を憚り。堪忍の胸を押へしは幾度。明日は最早了簡ならず。御前にて恥面かゝせる武士の意地。其上にて討て捨る必ず留るな。日比某を短慮なりと。奥を始其方が異見。幾度か胸にとつくと合點なれども。無念重る武士の性根。家の斷絶奥が歎き。思はんにては無けれども。刀の役目弓矢神への恐れ。地戰場にて討死はせず共。師直一人討て捨れば天下の爲。家の恥辱には替られぬ。必々短氣故に身を果す若狹助。猪武者ぶゐ者しや狼狽者らんたいしやと。世の人口を思ふ故。汝に篤と打明すと。思込しん込こんだる無念の涙。五臓を貫く思ひなる。地横手を拍てしたりく。詞ハ、よう譯を仰しやつた。よう御了簡成され

た。此本藏なら今迄了簡はならぬ所。ヤイ本藏ナ、何と言た。今迄は能了簡した堪忍したとは。其方此若狭助を弄するか。是は御詞とも覺へず。冬は日陰夏は日面。除て通れば門中にて。行違の喧嘩口論ないと申すは町人の譬。武士の家でも杓子定規。除て通せば法度がないと申すのが本藏めが誤りか。御詞さみ致さぬ心底。地御覽に入んと御傍の。小刀拔より早く書院なる。召替草履片足片手の早ねた奴。とつくと合せ縁先の松の片枝。すつばと切て手敏捷。フシ鞘に納め。詞サア殿。先此通に瀟洒と遊ばせ。言にや及ぶ。地人や聞と傍に氣を付。今夜はまだ九つくつたりと一休。枕時計の目覺し本藏めが仕掛置早く。詞ヲ、聞入有て満足せり。奥にも逢て餘所ながらの暇乞。モウ逢ぬぞよ本藏。地さらばくと言捨て。奥の一間に入給ふ。フシ武士の意氣地は是非もなし。地御後影見送り。勝手口へ走出。詞本藏が家來共。馬牽け早くと言間もなく。地股立しやんと栗々敷様に御庭に牽出せば。地縁より閃と打乗て師直の館迄。繼や續けと乗出す。轡に縋つてとなせ小浪。詞コレ。何處へ。始終の様子は聞ました年にこそ由れ本藏殿。主人に御異見も申さず。合點行ぬ留ますと。地母と娘がぶら。轡に縋り留むれば。詞ヤア小差出た。主人の御命御家の爲思ふ故に此時宜。必此事殿へ御沙汰致すな。御耳へ入たら娘は勘當。となせば夫婦の縁を切る。家來共道にて諸事を言付ん。其處退兩人イヤイヤ。シヤ面倒なと鐙の端。一當はつしと當られて。うんと計に仰向に反るを見向もせず。家來續と馬煙追立打立力足踏立てこそ。三重へ驅り行く。

第三

地足利左兵衛督直義公。關八州の管領と新に建し御殿の結構。大名小名美麗を飭る晴装束。鎌倉山の星月夜と袖を列る御馳走に。御能役者は裏門口。表御門は御客人御衆應の役人衆。正七ツ時の御登城。フシ武家の威光ぞ耀ける。地西の御門の見附の方。ハイ。と嚴然挑燈照し入来るは。武藏守高師直。權威を顯はす鼻高く。花色模

様の太紋に。胸に我慢の立烏帽子。家來共を役所へに残し置。下部僅に先を拂はせ。主の威光の召おろし。鶴の眞似する鶯坂内。肩臂嚴らし申し御旦那。詞今日の御前表も上首尾へ。鹽治で候の。イヤ桃井で候のと。日比はとつばさつばとどしめけど。行儀作法は狗を。家根へ上た様で。去とは腹の皮。イヤ夫に付兼々鹽治が妻かほよ御前。未だ殿へ御返事致さぬ由。御氣にはさへられな。器量は好けれど氣が叶はぬ。何と鹽治輩と。當時出頭の師直様と。ヤイ、聲高に口利な。主あるかほよ。度々歌の師範に事寄。口説ども今に叶へぬ。則ち彼が召便かると云侍婢新參と聞。其奴をこま付頼んで見ん。扱まだとりえがある。かほよが誠に否ならば。夫鹽谷に仔細をぐわらり打明る。所を言はぬは樂みと。地四足門の片陰に主從點頭咄合フシ折もあれ。地見附に控へし侍。遽しく走出。詞我見附の御腰掛に控へし所へ。桃井若狭助家來加古川本藏。師直様へ直に御目にかゝらん爲。早馬にて御屋敷へ參つたれども早御登城。是非御意得奉らんと。家來も大勢召連たる體。地如何計ひ申さんやと。聞より伴内騒出し。詞今日御用のある師直様へ直に對面とは推參なり。地某直談と走行を。詞待々伴内仔細は知れた。一昨日鶴が岡にての意趣晴し。我手を出さず本藏めに言付。此師直が威光の鼻を挫かん爲。ハ、ハ、ハ、伴内ぬかるな。地七ツにはまだ間もあらん。是へ呼出せ仕廻てくれん。成程、家來共氣を配れと。主從刀の目釘を濕し。手天鼠引てフシ待掛居る。地詞に隨ひ加古川本藏。衣紋繕ひ悠々と打通り。下部に持せし進物共。師直が目通に並べさせ。フシ遙下つて躊躇り。詞ハア憚りながら師直様へ申上奉る。此度主人若狭助。尊氏將軍より御大役仰付られ下さる段。武士の面目。身に餘る仕合。若輩の若狭助。何の作法も覺束なく。いかゞあらんと存の所に。師直様萬事御師範を遊ばされ。諸事を御引廻し下され候故。首尾能御用相勤るも全く主人が手柄にあらず。皆師直様の御執成と。主人を始奥方一家中我々迄も大慶此上や候べき。去によつて近比些少の至に候へ共。右御禮の爲一家中よりの贈物。御受遊ばされ下さらば。生前の面目一入願ひ奉る。地則日録御取次と伴内に指出せば。不思議をふに密と取り押披き。詞目錄一

ツ巻物三十本黄金三十枚若狭助東方。一ツ黄金二十枚家老古川本藏。同十枚番頭。同十枚侍中。地右の通と讀上れば。師直開た口閉がれもせず恍惚と。主従顔を見合せて。放心の様にきよりつと。祭の延た六月の晦日見るが如くにて。フシ手持不沙汰に見へにける。地俄に詞改めて。詞是はく痛入たる仕合。伴内是りや如何した物。ハテ扱々。ハア御辭義申さば御志背くと言ひ。第一は大きな無禮。エ、式作法を教るも。此様な折にはとんと困る。ナニ物ぢやは。イヤハヤ本藏殿。何の師範致す程の事もないが。兎角マア若狭助殿は器用者。師範の拙者及ばぬ及ばぬ。コリヤ伴内進物共皆取納め。エ、不行儀な途中で御茶さへ得進せぬと。地手の裏覆す挨拶に本藏が胸算用仕て遣たりと猶も手をつき。詞最早七ツの刻限早御暇。殊に今日は猶晴の御座敷。彌主人の儀御引廻し頼存ると。地立んとする袂を控へ。詞ハテ宜わいの。貴殿も今日の御座敷の座次、拜見なされぬか。イヤ陪臣の某御前の恐。大事ないく。此師直が同道するに。誰がくつと言者無い。殊に又若狭助殿も。何ぞ有夫ぞ有に用の有る物。平に平にと勸られ。地然らば御供仕らん。詞御意を背くは却て無禮。地先御先へと跡に就。金で煩はる算用に。主人の命も買て取。二一天作算盤の。衍を違ぬ白鼠。忠義忠臣忠孝の。道は一筋真直に打連フシ御門に入にける。フシ程もあらさず入来るは。鹽治判官高定。是も家來を残し置。乗物道に立させ。譜代の侍早野勘平。朽葉小紋の新袴。騒々ざわつく御門前。詞鹽治判官高定登城なりとおとなひける。門番罷出。先程桃井様御登城遊ばされ御尋。只今又師直様御越にて御尋。早御入と相述る。ナニ勘平最早皆々御入とや。地遅なはりし残念と。勘平一人御供にてフシ御前へこそは急ぎ行。地奥の御殿は御馳走の。連語の聲播磨がた。師高砂の浦に着にけりく。地諸ふ聲を門外へ。フシ風が持来る柳陰。其柳より風俗は。負ぬ所體の十八九。松の緑の細肩も堅い屋敷に物馴し。奇特帽子の後帯供の奴が提灯はフシ鹽治が家の紋所。地御門前に立休らひ。詞コレ奴殿。頼て最う夜も明る。此方家は門内へは叶はぬ。爰から往んで休んでやと。地詞に従ひナイくとフシ供の下部は歸りける。地内を覗て勘平殿は何してぞ。どふぞ逢

たい用が有。と見廻す折から後影。ちらと見付。詞おかるぢやないか。勘平様逢たかつたにようこそく。ム、合點の行ぬ夜中と言ひ。供をも通ず只一人。さいなあ。爰まで送りし供の奴は先へ歸した。私獨残りしは。奥様からの御使。どふぞ勘平に逢て此文箱。判官様の御手に渡し。お慮外ながら此返歌を御前の御手から直に師直様へ。御渡しなされ下さりませと傳へよ。併し。御取込の中間違まい物でなし。マア今宵はよしにせうとの御詞。詞わたしや御前に逢たい望。何の此歌の一首や二首。御屈なさるゝ程の間の無い事は有まいと。遂一走に走つて來た。フシア、しんどやと吐息つく。詞然らば此文箱旦那の手から師直様へ渡せば宜じやまで。地どりや渡し來ふ待て居いといふ中に門内より。詞勘平くく判官様が召まする。勘平く。ハイく。只今それへ。地エ、せはしないとフシ袖振切て行跡へ。地蹴踏足付驚坂伴内。詞何とおかる戀の智慧は又格別。勘平めとせくつて居る所を。勘平く旦那が御召と呼だはきつい。師直様がそもじに頼たい事が有と仰しやる。我等はそさまにたつた一度。地君よくと抱付を突飛し。詞コレ狼な事遊ばすな。式作法の御家に居ながら狼藉千萬。あた不法なあた不行義と。地突退れば夫は難面。暗がり紛に逐ちよくくと。手を取争ふ其中に。地伴内様く師直様の急御用伴内様くと。地奴二人が胡亂胡亂眼玉ではしたり伴内様。詞最前から師直様が御尋。式作法の御家に居ながら。女を捕てあた不行義な。あた不法作法と。地下部が口々。エ、同じ様に何フシぬかすと。頬膨らして述立行。地勘平跡へ入替り。詞何と今の御見たか。伴内めが一盃喰ふて行おつた。吾が來て旦那が呼しやると言ふと。措け古いとぬかすが面倒さに。奴共に酒吞せ。古いと言さぬ此方術。ハ、くく充分と首尾は仕課せさ。サア其首尾序にな。地一寸くと手を取ば。詞ハハテ扱はづんだマア待ちやいの。何言はんすやら。何の侍事が有ぞいなア。最ふ頓て夜が明るはいな。地是非にく是非なくも下地は好なり御意は善。詞夫て爰は人出入。地奥は謠の聲高砂。謠せうこんによつてこしをすれば。詞アノ謠で思ひ付た。地イザ腰掛てと手を引合打連て行。地脇能過て御樂屋に鼓の調太鼓の音。天下泰平繁昌の謠

祝ふ直義公。御嫌機斜、フシならざりける。地若狭助は兼て待師直遅しと御殿の内。奥を窺ふ長袴の紐締括り氣配し。已師直眞二つと刀のこひ口息を詰。フシ待とも知らぬ。地師直主従遠目に見付。詞是は「若狭助殿。扱々御早い御登城。イヤヘヤ我折ました。我等開口」。イヤ閉口序に貴殿に言譯致し。御託申す事が有と。地兩腰ぐわらりと投出し。御若狭助殿。改めて申さねばならぬ一通。日外鶴が岡で。拙者が申した過言。ヲ、御腹が立たて有ふ尤じやが。そこを御託。其時はどふやらしいした詞の間違て遂申した。我等一生の龜忽。武士がこれ手を下る眞平。假令其元が物馴た御人なりやこそ。外々の狼藉者て見さつしやれ。此師直眞二つ怖や。有やうが其節貴殿の後影。手を合して拜ましたアハ、ア、年寄と太義。年に免じて御免。是。武士が刀を投出し手を合す。是程に申すのを聞入ぬ貴公でもないはさ。兎角幾重にも誤り。伴内俱々に地御託。金が言はする追従とは夢にもしらぬ若狭助。示威し腕も拍子脱。今更拔にぬかれもせず。ねた双合せし刀の手前さし俯向し思案顔。小柴の陰には本藏が。影もせずフシ守居る。詞ナニ件内此鹽治は何故遅い。若狭助殿とはきつひ違ひ。扱々不行義者。今に於て頼出しせぬ主が主なれば家老て候とて。諸事に細心の付奴が獨もない。いざ。若狭助殿御前へ御供致。サア御立成され。サアサア師直め誤つて居るぞ。コリヤ爰な粹め。粹様め。イヤ若狭助殿御前。ちと心悪うござる。マア先へ。何とした。腹痛か。コレサ伴内御背。御藥進上かな。イヤ。夫程にも御座らぬ。然らば少の内御寛。御前の首尾は我等が宜様に申上る。伴内一間へ御供申せと。地主従寄て御手車に迷惑ながら若狭助。是はと思へど是非なくも。奥の間へ入れれば。ア、最ふ樂じやと。本藏は。天を拜し地を拜しフシ御次の間にぞ控居る。地程もあらさず鹽治判官。御前へ通る長廊下師直呼かけ遅し。詞何と心得て御座る。今日は正七時と。先刻から申渡したてないか。成程遅なはりしは不調法去ながら。御前へ出るは未だ間もあらんと。地袂より文箱取出し。詞最前手前の家來が。貴公へ御渡し申くれよ。則奥かほ上方より参りしと。地渡せば請取成程。詞イヤ其元の

御内實は扱々心懸が御座るは。手前が和歌の道に心を寄るを聞。添削を頼と有。地定て其事ならんと押ひらき。詞さなきだに。おもきが上の狭夜衣。わがつまならぬつまな重ねぞ。ハア是は新古今の歌。此古歌に添削とはム、ム、と思案の内。我戀の叶はぬ驗。扱は夫にも打明しと思ふ怒を左あらぬ顔。詞判官殿。此歌御覽じたて御座らふ。イヤ只今見ました。ム、手前が讀のを。ア、貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるゝ歌が是じや。つまならぬつまな重ねそ。ア、貞女。ア其元はあやかり物。登城も遅なはる筈の事。内に計へばり付て御座るに依て。前御の方は御構ひないじやと。地當こする難言過言。彼許の喧嘩の門違ひとは。判官更に合點行ず。むつとせしが押鎮。詞ハ、くくく是はく。師直殿には御酒機嫌か。御酒参つたの。何時盛しやつた。イヤ何時吞ました。御酒下されても飲いても。勤る所は急度勤る。貴公は何故遅かつたの。御酒参つたか。イヤ内にへばり付てござつたか。貴殿より若狭助殿。ア、格別勤られます。イヤ又其元の奥方は貞女といひ。御容色と申し。手跡は見事。御自慢なされ。むつと成されな虚言はないはさ。今日御前には御取込。手前迎も同然。其中へ鼻毛らしい。イヤ是は手前が奥が歌でござる。夫程内が大切なら御出御無用。總體貴様の様な。内に計居る者を。井戸の鮎じやと言ふ譬がある。聞て置しやれ。彼鮎めが僅三尺か四尺の井の内を。天にも地にも無い様に思ふて。不斷外を見る事がない。所に彼井戸浚に釣瓶に付て上ります。夫を川へ放し遣ると。何が内に計居る奴じやに依て。悦んで途を失ひ。橋杭で鼻を打て。即座にびりくくく死します。貴様も恰好鮎と同じ事ハ、くくくと。地出フシ放題。地判官腹に鎮兼。詞是りや其許狂氣召つたか。イヤ氣が違ふたか師直。シヤ此奴武士を執へて氣違ひとは。出頭第一の高師直。ム、すりや今の惡言は本性よな。くどい。又本性なりや如何する。地ヲ、斯様すると拔討に。眞向へ切付る眉間の大傷。是はと沈む身のかはし。烏帽子の頭二つに切。又切懸るを抜つ落りつ逃廻る折もあれ。御次に控へし本藏走出て押留め。詞コレ判官様御短慮と。地抱留る其際に師直は。館を指て顛つ轉びつ逃行は。己師直眞一つ。放せ本藏放しやれと迫合内。

館も俄に騒出し。家中の諸武士大名小名。押へて刀もぎ取やら。師直を介抱やら上を下へと。三重へ立騒ぐ。地表御門裏御門。兩方閉たる館の騒動挑燈閃く大騒ぎ。早野勘平狼狽眼走歸つて裏御門。碎よ破よと打叩大聲上。詞鹽治判官の御内早野勘平主人の安否心元なし爰明て給へ。地早くくくとフシ呼はつたり。地門内よりも聲高々。詞御用あらば表へ廻れ爰は裏門。成程裏門合點。裏御門は家中の大勢早馬にて寄付れず。喧嘩の様子は何とく。喧嘩の次第相濟だ。出頭の師直様へ慮外致せし科に依て。鹽治判官は閉門仰付られ。網乗物にて只今歸られしと聞より。ハア南無三寶。御屋敷へと走係つて。イヤくくく。閉門ならば館へは猶歸られじと行つ戻りつ思案最中。姫おかる道にてはぐれやア勘平殿。詞様子は残らず聞しました。地こりや何とせう如何せうと取付。歎くを取て突退。詞エ、めろめろと吠頼。コリヤ勘平が武士は捨つたはやい。地最ふ是迄と刀の柄コレ待て下され。詞是りや狼狽てか勘平殿。ヲ、うろたへた。是が狼狽ずに居られふか。主人一生懸命の場にも在合さず剩へ。囚人同前の網乗物御屋敷は閉門。其家來は色に耽り御供に外れしと人中へ。兩腰指て出られふか爰を放せマ、待て下さんせ。尤じや道理じやが。其狼狽武士には誰が仕た。皆わしが心から死る道ならお前より私が先へ死なねばならぬ。今お前が死だらば誰が侍じやと騒まする。爰をつくりと聞分て。わたしが親里へ一先來て下さんせ。父様も母様も在所でこそ有頼母數人。最ふ斯成た。地因果じやと思ふて女房の言事も。聞て下され勘平殿とわつと計に。泣沈む。詞そふじや尤。其方は新參なれば委細の事は得知るまい。御家の執權大星由良之助殿。未だ本國より歸られず。歸國を待て御託せん。サア地一時成とも急がんと身拵へする所へ。地驚坂件内家來引連願出。詞ヤア勘平汝が主人判官師直様へ慮外を働きかすり疵負せし科に依て屋敷は閉門。追付首が飛は知れた事サア腕廻せ。地連歸つてなぶり切覺悟ひろげと犇然ば。ヤア詞宜所へ驚坂件内。己一羽で喰足ねど。勘平が腕の細ねふか。料理鹽梅喰て見よ、イヤ地物な言すな家來ども畏つたと兩方より。取たと係るをまつかせと搔潜り。兩手に兩腕捻上はつしフシくと蹴返せば。地替つて切込

切先を刀の鞘にて丁ど受。廻つて来るを鎧と柄にて仰向に外し。四人一所に切係るを右と左へ一時に。でんがく返しにばた／＼と打据られ。皆散々に行跡へ。伴内急て切かくる引外しそつ首握り。大地へどうと筋斗打せしつかと踏付。調サアどふせうと此方の儘。突ふか切ふか。地鞠殺しと振上る刀に縋て。調コレ／＼其奴殺すと御詫の邪魔。地最ふ宜わいなと留る間に足の下をば狗鼠／＼と。尻に尾のない驚坂は。命辛々逃て行。地エ、残念／＼去ながら。彼奴をばらさば不忠の不忠。一先夫婦が身を隠し時節を。待て願ふて見ん。最早明六ツ東がしらむ横雲に。罫を離れ飛鳥かはい／＼の女夫連道は。急げど跡へ引。主人の御身いかゞぞと案じ行こそ。三重へ浮世なれ。

第四

地鹽治判官閉居によつて扇が谷の上屋敷。大竹にて門戸を閉。家中の外は出入を止め。フシ事嚴重に見へにける。フシ斯かる折にも。花やかに奥は。媚く女中の遊び。御臺所かほよ御前。御傍には大星力彌。殿の御氣を慰んと。鎌倉山の八重九重色々櫻。花籠に。活らるゝ花よりも。フシ生る人こそ花紅葉。地柳の間の廊下を傳ひ諸士頭原郷右衛門。跡に續て斧九太夫。調是は／＼力彌殿早い御出仕。イヤ某も國本より親共が参る迄。晝夜相詰罷在。地それは御奇特千萬と。郷右衛門兩手をつき。調今日殿の御機嫌は。如何御渡り遊ばさるゝと。地申上ればかほよ御前。調ヲ二人共太義／＼。此度は判官様御氣詰りに思召し。御所勞でも出やうかと案じたとは格別。明暮築山の花盛御覽じこ。御機嫌の能御願はせ。地夫故に。自も御慰に指上ふと。名有櫻を取寄て見遣る通の花拵へ。調ア、いか様にも仰の通。花は開く物なれば御門も開き。閉門を御赦さるゝ吉事の御趣向。拙者も何がたと存ずれど。個様な事の思付は。無調法なる郷右衛門。ヤア肝心の事申上ん。今日御上使の御出で承はりしが。定て殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん何と九太夫殿。そふは思召れぬか。ハ、ハ、コレ郷右衛門殿。此花といふ物も。當分人の目を喜ばす計。

風が吹は散失る。此方の詞もまつ其ごとく。人の心を喜ばさふ連。武士に似合ぬ。ぬらりくらりと跡から元る正月詞。なぜとおいやれ。此度殿の御越度は。饗應し御役儀を蒙りながら。執事たる人に手を負せ。館を騒せし科。輕うて流罪。重うて切腹。自體又師直公に。敵對は殿の御不覺と。聞も敢へず郷右衛門。詞扱は其方。殿の流罪切腹を願はるゝか。イヤ願ひは致さねど。詞を飭らず眞實を申すのじや。元をいへば郷右衛門殿。此方の悟惜しわさから發つた事。金銀を以て頬を打めさるれば。個様の事は出来申さぬと。地己が心に引當て。欲面打消す郷右衛門。詞人に媚諂ふは侍でない。武士でない喃力彌殿。地何とそふては有まいかと。詞の角を看る御臺。二人共に靜ひ無用。詞今度夫の御難儀なさる。元の發は此かほよ。日外鶴が岡て饗應の折柄。道しらずの師直。主の有自に無體な戀を言掛。種々と口説しが。恥を與へ慙させんと。判官様にも知らさず。地歌の點に事寄せ。さよ衣の歌を書き恥しめて遣たれば。詞戀の叶はぬ意趣ばらしに判官様に惡口。元來短氣な御生れ付。地得堪忍なされぬは御道理でないかいのと。語り給へば郷右衛門力彌も俱に御主君の。御憤りをフシ察し入。心外面に顯せり。地早御上使の御出と玄關廣間ひしめけば。奥へ斯と通じさせ御繋所も座をさがり三人出向ふ間もなく。入来る上使は石堂右馬之丞。師直が昵近藥師寺次郎左衛門。役目なれば罷通ると會釋もなく上座に着は。一間の内より鹽治判官。徐々と立出。詞是は。御上使と有て石堂段御苦勞千萬。先御盃の用意せよ。地御上使の趣き承り。いづれもと一獻汲。積鬱をはらし申さん。詞ヲ、夫宜ごさろ。藥師寺も御間致さふ。したが上意を聞いたら。酒も咽へ通るまいと。地嘲笑へば右馬之丞。詞我我今日。上使に立たる其趣。具に承知せられよと。地懷中より御書取出し。押附けば判官も席を改め承はる其文言。詞此度鹽治判官高定。私の宿意を以て。執事高師直を刃傷に及び。館を騒せし科に依て。國郡を沒收し。切腹申付る者也。地聞くよりはつと驚く御臺。並居る諸士も顔見合せ。フシあきれ。果たる計なり。地判官動ずる氣色もなく。御上意の趣委細承知仕る。詞扱是からは各の御苦勞休めに。打寛て御酒一ツ。コレ判官默止召さ

れ。其方が今度の科は。縛首にも及ぶべき所。御上の慈悲を以て。切腹仰付らるゝを有がたう思ひ。早速用意もすべ
 き筈。殊に以て切腹には定つた法の有物。夫に何ぞや。當世様の長羽織。ぞべらゝとしらるゝは。酒興か但血迷ふ
 たか。地上使に立たる石堂殿。此薬師寺へ不作法と。詰付れば莞爾と笑ひ。調此判官。酒興もせず血迷ひもせぬ。今
 日上使と聞よりも。斯あらんと期したる故。兼ての覚悟見すべしと。大小羽織を脱捨れば。下には用意の白小袖無紋
 の上下死装束。皆々是はと驚けば。薬師寺は言句も出ず。フシ顔膨らして閉口す。地右馬之丞指寄て。調御心底察し
 入。即ち拙者檢使の役。心靜に御覺悟。ア、御深切忝なし。刃傷に及びしより。斯あらんとは兼ての覺悟。恨ら
 くは館にて。加古川本藏に抱留られ。地師直を討洩し無念。骨髓に通つて忘れがたし。調湊川にて楠正成。最期の
 一念に依て生を引と言しごとく。生交り死替り。鬱憤を晴さんと。地怒の聲と諸共に。御次の櫓打叩。調一家中の
 者共。殿の御存生に御尊顔を拜し度願ひ。御前へ推參致さんや。郷右衛門殿御取次と。地家中の聲を聞ゆれば。郷右
 衛門御前に向ひ。調いかゞ計ひ候はん。フウ尤なる願ひなれ共。由良之助が參る迄無用。地はつと計一間に向
 ひ。調聞るゝ通りの御意なれば。一人も叶はぬ。地諸士は返す詞もなく。一間も寂と。フシ靜まりける。地力彌
 御意を承はり。兼て用意の腹切刀御前に直すれば。心靜に肩衣取退座を寛げ。調コレ。御檢使。御見届下さる
 べしと。地三方引寄九寸五分押戴。調力彌。ハア。由良之助は。未だ參上仕りませぬ。フウ。エ、存生に對
 面せて殘念。ハテ残り多やな。是非に及ばぬ是までと。地刀逆手に取直し。左手に突立引廻す。御臺二目と見も遣ら
 ず口に稱名目に涙。廊下の襖踏開き。驅込大星由良之助。主君の有様見るよりも。はつと計にだうと伏す。跡に續
 て千崎矢間。其外の一家中フシばらゝと驅入たり。調ヤレ由良之助待兼たはい。ハア御存生の御尊顔を拜し。身に取
 て何程か。ヲ、我も満足。定めて手細聞たである。エ、無念口惜いはやひ。委細承知仕る。此期に及び。申上
 る詞もなし。只御最期の尋常を。願はしう存まする。地ヲ、言ふにや及ぶと諸手を懸。ぐつゝと引廻し。苦しき息

をほとと吐。詞由良之助。此九寸五分は汝へ形見。我が鬱憤を晴させよと。地切先にて氣管刎切。血刀投出し空穴に
 どうど轉び息絶れば。御臺を始並居る家中。眼を閉息を詰齒を喰しぱり控ゆれば。由良之助にじり密刀取上押戴。
 血に染る切先を打守り。拳を握り。無念の涙はら。判官の末期の一句五臟六腑に染渡り。扱こそ末世に
 大星が。忠臣義心の名を揚し。フシ根ざしは。斯としられけり。地藥師寺は突立上り。判官がくたばるからは早々
 屋敷を明渡せ。イヤ左は言はれな藥師寺。所謂一國一城の主。ヤ旁。葬送の儀式取附ひ。心靜かに立退れよ。此石
 堂は檢使の役目。切腹を見届たれば。此旨を言上せん。ナニ由良之助殿。御愁傷察し入。地用事あらば承はらん必
 ず心置れなと。列居る諸士に目禮し。悠々として立歸る。詞此藥師寺も死骸片付る其間。奥の間で休息せう。地家來
 參れと呼出し。詞家中共がらくた道具門前へはうり出せ。判官が所持の道具。俄浪人にまげられなと。地館の四方
 を脱廻し。フシ一間の内へ入にける。地御臺はわつと聲を上。扱も。武士の身の上程悲しい物の有べきか。今夫の
 御最期に言たい事は山々なれど。未練なと御上使のさげしみが恥かしさに。今まで堪て居たわいの。最愛の有様やと。
 亡骸に抱付。フシ前後も分ず泣給ふ。詞力彌參れ。御臺所諸共亡君の御骸を。御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。
 由良之助も跡より追付。葬々の儀式執行はん。堀矢間小寺間其外一家中道の警固いたされよと。詞の下より御乗物手
 舁に舁する戸を開き。皆立寄て。御死骸フシ涙と俱に。載奉り。しづくと舁上れば。御臺所は正體なく。歎き給
 ふを慰て。諸士の面々我一と。御乗物に引添ひ引添ひ御菩提の所へと急行。地人々御骸見送つて。座に着けば斧九
 太夫。詞何大星殿。其元は御親父八幡六郎殿よりの家老職。拙者迎も其右には座せ共。今日より浪人となり。妻子を
 養育術なし。殿の貯置給ふ御用金を配分し。早く屋敷を渡さずば。藥師寺殿へ無禮ならん。イヤ千崎があるには。
 指す敵の高的師直。存命なるが我々が鬱憤。耐手を引受。此館を枕として。ア、これ。耐死とは悪い了簡。親九
 太夫の申さるゝ通屋敷を渡し。金銀を分て取が上分別と。地評議の中に由良之助。默然として居たりしが。詞只今の

評定に。彌五郎の所存と。我が胸中一致せり。所謂亡君の御爲に。我々殉死すべき筈。むぎ／＼と腹切ふより。足利の討手を待請。討死と一決せり。ヤア何と言ふ。能い評定かと思へば。浪人の瘦顔はり。足利殿に弓弾ふ。ア夫は無分別。マア此九太夫合點がいかに。ヲ、親父殿をふじや。此定九郎も其意を得ぬ。地此談合には省いて貰はふ。長居は無益お歸りなされ。調夫宜ろ。地孰れも緩りと居召されと。フシ親子召通立歸る。地ヤア欲煩の斧親子。討死を聞怖して逃歸つたる臆病者。彼奴構はずと大星殿。討手を待つ御用意。調ア、さわがれな彌五郎。足利殿に何恨有て弓弾べき。彼等親子が心底を探らん爲の計略。薬師寺に屋敷を渡し。思ひ／＼に當所を立退。地都山科にて再會し。胸中残さず打明て。評議を占んといふ間もあらせず。次郎左衛門一間を立出。調ハテベン／＼と長評議。死體片付たら。早く屋敷を明渡しと。地いがみ掛れば郷右衛門。調ア、成程お待兼。亡君所持の御道具。其外の武具馬具迄よく／＼改め請取られよ。サア由良之助殿退散あれ。地ヲ、心得たりとしづ／＼と立上り。調御先祖代々我々も代々。地晝夜詰たる館の内今日を限りと思ふにぞ。地名殘惜氣に見返り。／＼御門外へ立出れば。地御骸送り奉り。力彌矢間堀小寺追々に馳歸り。調扱は屋敷を御渡し有たか。此上は直義の。地討手を引請討死せんと。はやり立ば由良之助。調イヤ／＼今死すべき所にあらず。是を見よ旁と。地亡君の御簞を放放し。調此切先には。我君の御血をあやし。御無念の魂を残されし九寸五分。此刀にて師直が。首掻切て本意を遂ん。地實尤と諸武士の勇。屋敷の内には薬師寺次郎。門の關拔はつしと立させ。調師直公の罰が當り。扱よいざま／＼と。地家來一度に手を叩き。咄と笑ふ。フシ鯨波。地アレ聞れよと若侍取て返すを由良之助。調先君の御憤り。晴さんと思ふ所存はないか。地はつと一度に立出しが。思へば無念と館の内を。振返り／＼。はつたと睨んで。三重へ立出る。

地蔵は死ても穂は摘ずと譬に洩ず入る月や。日數も積る山崎の。邊に近き佗住居。早の勘平若氣の誤り世渡るもとて細道傳ひ。此山中の鹿猿を打て商ふ種が嶋も。用意に持や杖まで鐵炮雨の震動雷電。誰水無月と白雨の。晴間をフシ爰に松の陰。地に向ふより來る小桃燈も昔は月張の灯火消さじ滯さじと。合羽の裾に大雨を凌ぎ急ぐ夜の道。コイヤ申し。卒爾ながら火を一ツ地御無心と立寄れば。旅人もちやくと身構し。詞ム、此街道は無用心と知つて合點の一人旅。見れば飛道具の一口商。地得こそは食さじ出直せと。恟と動かば一討とフシ眼を配れば。詞イヤ成程盜賊とのお目違ひ御尤千萬。我等は此邊の獵人なるが。先程の大雨に火口も濕り難義至極。サア鐵鉋夫へお渡し申す。地自身に火を付御貸と。他事なき詞顔付を。急度跳て。調和殿は早の勘平ならずや。さいふ貴殿は千崎彌五郎。是は堅固て御無事とて地絶て久敷對面に。主人の御家没落の。胸に忘れぬ無念の思ひ互に。拳を握り合。地勘平は指俯向。暫し詞もなかりしが。詞エ、面目もなき我身の上。古朋輩の貴殿にも。地顔も得上ぬ此仕合。武士の冥加に盡たるか。調殿判官公の御供先。御家の大事發しは是非に及ばぬ我不運。其場にも有合せず。御屋敷へは歸られず所詮。時節を待て御詫と。思ひの外の御切腹南無三寶。皆師直めがなす業。せめて冥途の御供と刀に手は懸たれど。地何を手柄に御供と。どの顔さげて言譯せんと心を碎く折から。調密に様子を承はれば。由良の助殿御親子郷右衛門殿を始として。故殿の尊憤散ぜん爲。寄々の思召立有との噂。我等迎も御勘當の身といふでもなし。手懸求め由良の助殿に對面遂げ。御企の連判に御加へ下さらば地生々世々の面目。貴殿に逢ふも優曇華の花を咲て侍の。一分立て給はれかし。古傍輩の好武士の情。御頼申すと兩手をつき。先非を悔し男フシ泣理り。せめて不便なる。地彌五郎も傍輩の悔道理と思へ共。大事をむぎと明さじと。詞コレサく勘平。はて扱。お手前は身の言譯に取難て。御企のイヤ連判などとは何の謔言。左様の尊曾てなし。某は由良の助殿より郷右衛門殿へ急の使。先君の御廟所へ。御石碑を建立せんとの催し。併我々迎も浪人の身の上。是こそ鹽治判官殿の御石塔と。末の世までも人の口の端に係る物語。

御用金を集る其御使。先君の御恩を思ふ人を撰世す爲。態と大事を明されず。先君の御恩を思はゞナ。合點か／＼と。地石碑に擬へ大星の。工を餘所に知らせしは。フシ實に傍輩の好みなり。調ヘア、忝い彌五郎殿。成程石碑と言ひ立て。御用金の御持ある事とづくに承り及び。某も何とぞして用金を調べ。それを力に御託と心は千々に碎け共。彌五郎殿。恥かしや主人の御罰で今此形容。誰に斯との便もなし。され共かるが親。與市兵衛と申は頼母しい。百姓。我々夫婦が判官公へ。不率公を悔歎き。何とぞして元の武士に立返れと。地翁爺共ニ歎悲しむ。是幸御邊に逢し物語。段々の子細を語り。元の武士に立返ると言聞さば。纔の田地も我子の爲何しに否は得も言じ。御用金を手係りに郷右衛門殿まで御取次。一入頼存ると餘義なき詞にム。成程。調然らば是より郷右衛門殿迄右の譯をも咄し。由良之助殿へ願ふて見ん。明々日は必急度。御返事。則郷右衛門殿の旅宿の所書と。地渡せば取て押戴。重々の御世話忝し。何とぞ急に御用金を拵。明々日御目に係らん。某が在家お尋あらば。此山崎の渡場を左へ取。與市兵衛とお尋あれば。早速相知れ申すべし。夜更ぬ内に早くも御出。コレ此行先は猶物騒。随分ぬかるな合點／＼。石碑成就する迄は。蚤にも噛さぬ此體。御邊も堅固で。御用金の便を待ぞ。地さらば／＼と兩方へ立別れてぞ急ぎ行。地又も降来る雨の足人の足音とぼ／＼と。道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も。直成心堅親仁一筋道の後から。調ヲ、イヲ、イ親仁殿。地宜い道連と呼はつて。斧九太夫が勘定九郎。身の置所白浪や此街道の夜働。フシだん平物を落指。調往時にから呼聲が。貴様の耳へは這入ぬか。此物騒な街道を。能い年をして大膽／＼。地連に成らふと向ふへ廻り。きよる付目玉ぞつとせしが追は老人。調是は／＼お若いに似ぬ御奇特な。私もよい年をして。一人旅はいやなれど。サアいづくの浦でも金程大切な物はない。去年の年貢に詰り。此中から一家中の在所へ無心に往れば。是もびたひらなかつた覺ならず。埒の明ぬ所に長居は成らず。すご／＼一人戻る道と。地半分言はさず。ヤイ喧ましい。調有様が年貢の納まらぬ其相談を聞には來ぬ。コレ親仁殿。おれが言ふ事篤と聞しやれや。マア斯じやは。こなたの懐に金な

ら四五拾兩の嵩。嶋の財布に有のを。とつくりと見付て來たのぢや。貸て下され。男が手を合す。定て貴様も何ぞ詰らぬ事か。子が難儀に及ぶによつてと云ふ様な。有格な事じやある。けれどおれが見込だら。ハテしよ事がないと諦て。貸して下され地くと懐へ手を指入。引すり出す嶋の財布。ア、申し夫は。詞夫とは。是程爰に有物と地引たくる手に縄付。詞イエく此財布は跡の在所で草鞋買逆。端錢を出しましたが。跡に残るは晝食の握飯。霍亂せん様にと娘がくれた和中散。反魂丹でござります。お赦しなされ下されませと。地ひつたくり逆行先へ立廻り。詞エエ聞分のない。慘酷料理するがいやさに。手ぬるう言へば付上る。サア其金爰へ撒出せ。遅いとたつた一討と地二尺八寸拜打喃悲しやといふ間もなく虚竹割と切付る。刀の廻りか手の廻りかはづれる拔身を兩手にしつかと掴付。詞どふでもこなた殺さしやるの。ヲ、知れた事。金の有のを見てする仕事。小言吐すとくだばれと。地肝先へ指付れ。詞マ、マア待て下されませ。ハア是非に及ばぬ。成程く。是は金でムります。けれ共此金は。私がたつた一人の娘がござる。其娘が命にも替へぬ。大切の男がござります。其男の爲に入る金。些譯有事故浪人して居ます。娘が申ますは。あのお人の浪人も元はわし故。何とぞして元の武士にして進ぜたいくと。嚟とわしと毎夜さ頼。ア身貧にはござります。どうもしがくの仕様もなく。婆というく談合して。娘にも吞込せ。弁へは必沙汰なしと謀合せ。ほんにく親子三人が血の涙の流れる金。夫をお前に取られて娘はなんと成ませう。コレ拜みます助けて下されませ。お前もお侍の果をふなが武士は相身互。此金がなければ。娘も弁も人様に顔が出されぬ。たつた一人の娘に通添ふ弁ぢやもの。不便にござる可愛ござる。了簡してお助なされて下されませ。エ、お前はお若いによつて未お子もござるまいが。頼がつてお子を持て御覽じませ。親仁が言居つたは尤じやと思召て。此場を助さしやつて下さりませ。マア一里行は私が在所。金を弁に渡してから殺されましょ。申しく娘が悦ぶ顔見てから死たうござります。これ申しア、あれ。く。くと。地呼ばれど跡先遠く山ッシ彦の笹に。哀催せり。ヲ、詞悲しい事つちや

は。まつととこぼへ。ヤイ。毫め。其金でおれが出世すりや。其恵でうぬが躬も出世するはやい。人に慈悲すりや惡うは報はぬ。アハかはいやと。地ぐつと突。うんと手足の七顛八倒。のたくり廻るを脚にて蹴返し。詞ヲ、最愛や。痛かろけれどおれに恨はないぞや。金が有りやこそ殺せ。金が無いや何のいの。金が敵ぢやいとしばや。南無阿彌陀。南無妙法蓮華經。地何方へ成とうせおると。刀も拔ぬ芋ざし抉り。草葉も朱に置く露や。年も六十四苦。フシ八苦あへなく息は絶にけり。地仕濟したりと件の財布。啗がり耳の掴讀。ヒヤ詞五拾兩。エ、久しぶりの御對面。地忝しと首に引繫死骸を直に谷底へ。刎込蹴込泥まぶれ。反は我身にかゝる共しらず立たる後より。逸散に來る手負猪ははならぬと身をよぎる。驅來る猪は一文字。木の根岩角踏立蹴立。鼻噴らして泥も草木も一捲に飛行ば。あはやと見送る定九郎が。背骨へ掛てどつさりと肋へ拔る二つ玉。うん共きやつ共言間なく。黨り返りてフシ死だるは心地よくこそ見へにけれ。地猪打留しと勘平は。鐵鉤提爰彼處探り廻りて扱こそと。引立れば猪にはあらず。詞ヤア、く是りや人ぢや南無三寶。地仕損じたりと思へど暗き眞の闇。誰人なるぞと問れもせず。まだ息あらんと抱起せば手に當る金財布。掴んで見れば四五拾兩。天の賜と押戴きく。猪より先へ逸散に飛がごとくに。三度へ急ぎける。

第六

歌みさき踊がしゆんだる程に。親仁出て見やばどんつ。ばどんつれて親仁出て見やばどんつ。麥かつ音の在郷歌。地所も名に負ふ山崎の小百姓。與市兵衛が塙生の住家。今け早野勘平が。浪々の身の隠れ里。女房おかるは寢亂れし。髪取上んと櫛箱の。あかつき掛て戻らぬ夫。待間も解けし投島田。結にいはいれぬ身の上を誰にか。黄楊の水櫛に。髪の色艶梳かへし。品好くしやんと結立しは。在所に惜しき姿なり。地母の辭も杖つきの。野道とぼく立歸り。ヲ、飼娘髪結やつたか。美しふ能う出來た。イヤもふ在所はどこもかも麥秋時分ていそがしい。今も蕨際で若い衆が麥か

つ歌に。親仁出て見やばどんつれてと唄ふを聞。親父殿の遅いが氣にかゝり。在口まで往れどようなふ影も形も見へぬ。さいなこりやまあどふして遅い事じや。わし一走見て來やんしよ。イヤなふ若い女の一人歩行はいらぬ事。殊に其方は雅い時から。在所あるく事さへ嫌ひで。鹽治様へ御奉公に遣たれと。どうでも草深い所に縁が有やら戻りやつたが。勘平殿と二人居やればおとましい顔も出ぬ。ヲ、母様の夫りや知れた事。好た男と添のじやもの。在所はおろか貧しい暮しても苦にならぬ。頓がて盆に成て。とさま出て見やかゝんつ。地かゝんつれてと云ふ歌の通。調勘平殿と只つた二人。踊見に往きやんしよ。地お前も若い時覺がある指合くらぬ瓦礫娘。フシ氣もわさく／＼と見へにける。調何ぼ其様に面白可笑しう言やつても。心の中はの。イエ／＼濟でござんす。主の爲に祇園町へ。勤奉公に行は兼て覺悟の前なれど。地年寄で爺様の世話やかしやんすが夫りやいやんな。調小身者なれど兄も鹽治様の御家來なれば。外の世話する様にもないと。地親子咄しの。フシ中道傳ひ。地駕籠を昇せて急ぎ來るは祇園町の一文字屋。爰じや爰じやと門口から。與市兵衛殿内にかと言つゝ這入ば。調是はまあ／＼遠い所を。ソレ娘煙草盆。地お茶上ましやと。親子して。槌てお家を始人屋の亭主。調親昨夜は是の親父殿もいかい太義。別條無う戻られましたか。エ、親は親仁殿と連立て來はなされませぬか。是はしたり。お前へ往てから今において。ヤア戻られぬか。ハテめんよふな。ハアア若し稱荷前をぶら付て彼玉殿につまゝりやせぬかの。コレ此中爰へ見に來て極だ通り。お娘の年も恰五年切。給銀は金百兩。さらに手を打た。是の親仁が言ふには。今夜中に渡さねばならぬ金有れば。今晚證文を認め。百兩の金子お貸なされて下されと。涙をこぼしての頼故。證文の上で半金渡し。残りも奉公人と引替の契約。何が其五十兩渡すと悦んで戴き。ほた／＼云ふて戻られたは最ふ四ツでも有ふかい。夜道を一人金持ていかぬ物と。留ても聞ず戻られたが。但しは道に。イエ／＼寄しやる所はなふか／＼様。無い共／＼。殊に一時も早うそなたやわしに金見せて。悦ばさふ連。いきせきと戻らしやる筈じやに合點がいかぬ。イヤこれ合點のいくいかぬは其方の穿鑿。こちはさがり

の金渡しして奉公人連れて往のと。地懷より金取出し跡金の五拾兩。是て都合百兩。調サア渡し受取しやれ。お前夫ても親仁殿の戻られぬ中になふ。かるわが身は遣られぬ。ハテぐずくと埒の明ぬ。コレぐつ共すつ共言はれぬ與市兵衛の印形。證文が物言ふ。今日から金で買切た體。一日違へばれ宛違ふ。地とふて個様せざ濟まいと手を取て引立て。マアく待てと取付母親突退退。無體に駕籠へ押込く。昇上る門の口。鐵鉤に義笠打かけ戻り係つて見る勘平。つかつかと内に入。調駕籠の内なは女房共こりやマアどこへ。ヲ、勘平殿よい所へよう戻つて下さつたと。地母の悦び其意を得ず。調どふても深い譯がある。母者人女房共。地様子聞ふとお家の真中。どつかと座れば文字の亭主。ヲウ調扱はこなたが奉公人の御亭じやの。譬夫ても何ても。號の夫などと脇より違亂妨申す者無之候と。親仁の印形有からは此方には構はぬ。早う奉公人を受取ふ。ヲ、聲應合點が行まい。兼てこなたに金の入る様子娘の咄して聞た故。地どふぞ調へて進ぜたいと。言ふた計で一錢の宛もなし。調そこで親父殿の言はしやるには。ひよつと此方の氣に女房賣て金調やうと。よもや思ふてでは有まいけれど。若し兩親の手前を遠慮して居やしやるまい物でもない。いつそ此與市兵衛が聲殿にしらす娘を賣ふ。まさかの時は切取するも侍の慣。女房賣ても恥にはならぬ。御主の益に立る金。調へておましたら。まんざら腹も立まいと。昨日から祇園町へ。折極に往て今に戻らしやれぬ故。親子案じて居る中へ親方殿が見へて。昨夜親仁殿に半金渡し。跡金の五拾兩と引替に。娘を連れて往のふといふてなれど。親父殿に逢ての上と譯をいふても聞入ず。今連れて往なしやる所どふせうぞ勘平殿。是はく先以て舅殿の心遣ひ忝い。したがこつちにもちつと能い事があれ共夫は追て。親父殿も戻られぬに女房共は渡されまい。とはなぜに。ハテ謂ば親なり判がより。尤も昨夜半金の五拾兩渡されたても有ふけれど。イヤこれ京大坂を股に懸け。女護嶋程奉公人を抱へる一文字屋。渡さぬ金を渡しと言ふて濟物かいの。まだ其上に慥な事が有てや。是の親仁が彼五拾兩といふ金を。手拭ひにぐるくと巻て懷に入らるゝ。そりや危険是に入て首に懸さつしやれと。おれが着て居る此單物の嶋の裂

て拵た金財布借たれば。頼がて首にかけて戻られう。ヤア何と。此方が着て居る此嶋の裂の金財布か。ヲ、てや。
 あの此嶋でや。何と慥な證據で有ふが。地聞よりはつと勘平が肝先にひしと答へ。傍邊に目を配り袂の財布見合せば。
 寸分違はぬ糸入嶋南無三寶。扱は昨夜鐵鉋で打殺したは舅で有たか。ハアはつと我胸板を二つ玉で打貫るゝより切な
 き思ひ。とはしらずして女房。詞コレこちの人そけくせずと。遣ものかやらぬ物か。分別して下さんせ。ヲ、成程。
 ハテ最ふあの様に慥に言るゝからは往きやらずは成るまいか。アノとつ様に逢いてもかへ。イヤく親父殿にも今朝
 一寸逢たが戻りは知れまい。フウそんなりや親父様に逢てかへ。地夫ならそふと言もせて母様にもわしにも案じさし
 てばつかりと言ふに文字も圖に乗て。詞七度尋て人疑じや。親仁の有所の知れたのでそつちもこつちも心が宜。ま
 だ此上にも四の五の有ば否共にでんど沙汰。まあくさらりと濟めてたい。あ袋も御亭も六條参りして些と寄しや
 れ。サアく駕に早う乗りや。アイくこれ勘平殿最ふ今彼地へ行ぞへ。年寄た二人の親達。どふてこな様の皆な世
 話。取分て親父様は強い持病。氣を付て下さんせと。地親の死期を露しらず。頼む不便さいちらしさ。いつそ打明有
 の儘。咄さんにも他人有と心を。痛め答へ居る。ヲ、詞聲殿。夫婦の別れ暇乞がしたかるけれど。そなたに未練な
 氣も出よかと思ふての事である。イエくなんぼ別れても。主の爲に身を賣ば悲しうも何ともない。わしや勇んで行
 く母様。したが父様に逢ずに行のが。ヲ、夫も戻らしやつたら遂逢に往かしやろぞいの。煩はぬ様に灸すへて。息災
 な顔見せに來てたも。鼻紙扇もなけりや不自由な。何にもよいか。とばつて怪我仕やんなと。地駕に乗まで心を付
 さらばや。さらば。何の因果で人並な娘を持。此悲しいめを見る事じやと。齒を切り泣ければ娘は駕にしがみ付。
 泣をしらさじ聞さじと。フシ聲をも立す咽かへる。地情なくも駕昇上ヲ道を進めて急行。地母は跡を見送りく。ア、
 由ない事言ふて娘も無悲しかる。ヲ、詞こな人わいの。親の身でさへ思ひ切が宜に。女房の事くつく思ふて。煩
 ふて下さんな。此親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいのふ。こなた逢たと云はしやつたの。ア、成程。そりまあどこら

勘平は。腰ふさぎ脇挟で出迎ひ。調コレハ／＼御南所共に。見苦しき埴生へ御出忝しと。頭を下れば郷右衛門。調見れば家内に取込も有さふな。イヤ最ふ瑣細な内證事。御構なく共いざ先あれへ。地然らば左様に致さんとずつと通り座に着ば。二人が前に兩手をつき。調此度殿の御大事にはづれたるは。拙者が重々の誤り。申開かん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り。亡君の御年忌。諸家中諸共相動る様に御兩所の御執成。地偏に頼奉ると。フシ身を謙退逃げれば。地郷右衛門取あへず。調先以て其方貯なき浪人の身として。多くの金子御石碑料に調進せられし段。由良之助殿甚だ感じ入れしが。石碑を営は亡君の御菩提。殿に不忠不義をせし其方の金子を以て。御石碑料に用ひられんは。御尊靈の御心にも叶ふまじと有て。金子は封の儘相戻さると。地詞の中より彌五郎懷中より金取出し。勘平が前に指置ば。はつと計に氣も轉倒。母は涙と諸共に。調コリヤ爰な悪人づら。今といふ今親の罰思ひしつたか。皆様も聞て下され。親父殿が年寄て後生の事は思はず。鞆の爲に娘を賣。金調へて戻らしやるを待伏して。あの様に殺して取た金じや物。天道様がなくばしらず。何て御用に立つ物ぞ。地親殺しの生盗人に。罰を當て下されぬは。神や佛も聞えぬ。調あの不孝者お前方の手に懸て。なぶり殺しにして下され。地わしや腹が立はいのと身を投。ふして泣居たる。地聞に驚き兩人刀押取。弓手馬手に詰懸。彌五郎聲をあらゝげ。ヤイ。調勘平非義非道の金取て。身の科の詫せよとは言ぬぞよ。わが様な人非人武士の道は耳に入まい。親同然の舅を殺し金を盗んだ重罪人は。大身鎧の田樂刺。拙者が手料理振舞はんと。地はつたと睨めば郷右衛門。調渴しても盗泉の水を飲ずとは義者の誠。舅を殺し取たる金。亡君の御用金に成べきか。生得汝が不忠不義の根性にて。調へたる金と推察有て。突戻されたる由良之助の眼力天晴。去ながら。ハア情なきは此事世上に流布有て。鹽治判官の家來早野勘平。非義非道を行ひしと言はじ。汝許が恥ならず。亡君の御恥辱と知らざるか。左程の事の辨へなき汝にてはなかりしが。如何なる天魔が見入しと。地親眼に涙を浮め事を解理を攻れば。耐り兼て勘平。諸肌押脱脇指を。抜より早く腹にくつと突立。

ア、調執れもの手前而目もなき仕合。拙者が望叶はぬ時は切腹と兼ての覚悟。我舅を殺せし事亡君の御恥辱とあれば一通申ひらかん。兩人共に聞て給へ。夜前彌五郎殿の御目に懸り。別れて歸る闇紛れ山越す猪に出合。二つ玉にて打留。驅寄て探見れば。猪にはあらで旅人。南無三寶過たり。薬はなきかと懷中を捜見れば。財布に入たる此金。道ならぬ事なれ共天より我に與ふる金と。直に馳行彌五郎殿に彼金を渡し。立歸つて様子を聞けば。打留たるは我舅。金は女房を賣た金。地斯程迄する事なす事。鵜の背ほど違ふといふも。武運に盡たる勘平が。身の成行推量有れと血走る眼に無念の涙。地子細を聞より。彌五郎ずんと立上り。死骸引上打返しムウ／＼と疵口改め。地郷右衛門是れ見られよ。鐵鉋疵に似たれ共。是は刀で抉つた疵。エ、勘平早まりしと。地いふに手負も見て悔り。フシ母も驚く計なり。地郷右衛門心付。調イヤコレ千崎殿。ア、是にて思ひ當つたり。御自分も見られし通。是へ来る道端に。鐵鉋受たる旅人の死骸。立寄見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ。見限つて勘當したる悪黨者。身のイなき故に。山賊すると聞たるが疑ひもなく勘平が。舅を討たは奴が業。エ、そんなりや。あの親父殿を殺したは。外の者でござりましかへ。ハアはつと。地母は手負に縫り。調コレ手を合して拜ます。年寄の愚痴な心から恨いふたも皆誤り。地堪へて下され勘平殿。必死んで下さるなと。泣詫れば顔ふり上。調只今母の疑ひも。我が悪名も晴たれば。是を冥途の思ひ出とし。跡より追付舅殿。死出三途を伴はんと。地突込刀引廻せば。ア、暫く／＼。調思はずも其方が舅の敵討たるは。いまだ武運に盡さる所。地弓矢神の御恵にて。一劫立たる勘平。息のある中郷右衛門が密に見する物有と。懷中より一巻を取り出し。さら／＼と押披き。調此度亡君の敵。高の師直を討取んと神文を取交し。一味徒黨の連判此の如しと。地讀も終らず苦痛の勘平。其姓名は誰ぞ成ぞや。調ヲ、徒黨の人数は四十五人汝が心底見届たれば。其方を指加へ一味の義士四十六人。是を冥途の土産にせよと。地懷中の矢立取出し姓名を書記し。調勘平血判。心地得たりと腹十文字に搔切。臟腑を擲てしつかと押。サア調血判仕つた。ア、忝や有がたや。我望達したり。母人歎て

下さるな。舅の最期も。女房の奉公も。反古にはならぬ此金。一味徒黨の御用金と。地いふに母も涙ながら。財布と俱に二包二人が前に指出し。勘平殿の魂の入た此財布。地聲殿じやと思ふて。敵討の御供に連てッシござつて下さりませ。調ヲ、成程尤なりと郷右衛門金取納め。地思へば、此金は八嶋の財布の紫摩黄金。佛果を得よと言ければ。調ア、佛果とは穢はし。死なぬ。魂魄此土に留まつて。敵討の御供すると。地言聲も早四苦八苦。母は涙に搔暮ながらナフ勘平殿。此事を娘にしらし。せめて死目に逢してやりたい。調イヤ、親の最期は格別。勘平が死んだ事必知らして下さるな。お主の爲に賣たる女房。此事聞て不奉公せば。お主に不忠するも同然。只其儘に指置れよ。サア思ひ置事なしと。地刀の切先咽にぐつと指貫きッシかつばと伏して息絶たり。ヤア、勘平最ふ聲殿は死なしやつたか。地扱も、世の中におれが様な因果な者が又と一人有うか。親父殿は死なしやる頼に思ふ聲を先立て。最愛はいの娘には生別れ。年寄た此母が一人残つて是がマア。何と生て居られうぞ。コレ、調親父殿與市兵衛殿。地おれも一所に連て往て下されと。取付ては泣叫び。又立上つてコレ聲殿。母も俱にと縋付ては伏洗み。あちらでは泣こちらでは泣。わつと計にどふど伏し。聲をばかりにッシ歎しは目も當。られぬ次第なり。地郷右衛門突立上り。ヤア、調これ、老母。歎かるゝは、理なれ共。勘平が最期の様子。大星殿に委く語り。入用金手渡しせば満足あらん。地首に掛たる此金は。聲と舅の七七日。四十九日や五十兩。合て百兩百ヶ日の追善供養。跡懇に弔はれよさらばさらば。おさらばと見送る涙見返る涙。涙の浪の立返る人も。果敢なき。

第七

歌花に遊ば、祇園邊の色揃へ。東方南方北方西方。彌陀の淨土がぬりに塗立びつかりびか。光り耀はくや懸子に。いかな粹奴も。現ぬかして。愚鈍とろつくどろつくや。ワイワイノ、調誰そ頼ふ。亭主は居ぬか。亭主。是はい

そがしいは。何奴様じや。何方様じや。エ斧九太様。御案内とはけうといく。イヤ初めてののお方を同道申した。きつう取込そふに見へるが。一つ上ます座敷が有か。御座ります共。今晩は彼由良大盡の御趣向で。名有色達を攝込。下座敷は塞つてござりますすれど。亭座敷が明てござります。夫りや又蜘蛛の巣だらけて有ふ。又悪口を。イヤサよい年をして。女郎の蜘蛛の巣に纏らまい用心。コリヤきつい。下に置れぬ二階座敷。ソレ灯を點せ中居共。お盃お烟草盆と。地高い調子に柳かけて奥は腫の太鼓三味ナント。調伴内殿。由良之助が體御覽じたか。九太夫殿。ありやいつそ氣違ひでござる。段々貴様より御内通有ても。あれ程に有ふとは。主人師直も存ぜず。拙者に罷登て見届。心得ぬ事あらば。早速にしらせよと申付ましたが。擬々々我もへんしも折ましてござる。筋力彌めは何と致したな。此奴も折節此所へ参り俱に放埒。指合くらぬが不思議の一つ。今晩は底の底を搜見んと。心工を致して参つた。密々にお咄し申さふ。いざ二階へ。先々。然らば斯うお出。歌實は心に思ひはせいであだな。惚た／＼の口先はいかひつやでは有はいな。彌五郎殿。喜多八殿。是が由良之助殿の遊び茶屋。一力と申すのでござる。コレサ平右衛門。よい時分に呼出さふ。勝手に控てお居やれ。畏りました。宜う頼上ます。誰ぞ一寸頼たい。アイ／＼どな様じやへ。イヤ我々は由良之助殿に用事有て参つた。奥へ往て言はふには。矢間十太郎。千崎彌五郎。竹森喜多八でござる。此間より節々迎の人を遣しますれ共。お歸りのない故。三人連で参りました。ちと御相談申さねばならぬ義がござる程に。お逢なされて下されと急度申して呉れ。夫は何共氣の毒でござんす。由良様は三日以來飲續。お逢なされてからたはゐ有まい。本性はないぞへ。ハテ扱まあさう言ふてお呉りやれ。アイ／＼彌五郎殿お聞なされたか。承はつて驚入ました。初程は敵へ聞する計略と存じましたが。いかふ遊びに實が入過まして。合點が参らぬ。何と此喜多八が申した通。魂が入代つてござらふがの。いつそ一間へ踏込。イヤ／＼篤と面談致した上。成程。然らば是に待ませう。手の鳴方へ。くく捕まよ。くく。由良鬼やまだい。くく捕まへて酒吞そく。コリヤとらまへたは。サ

ア酒々。銚子持く。イヤコレ由良之助殿。矢間十太郎でござる。こりや何と成る。南無三寶仕舞ふた。ヲ、氣の毒何と榮さん。ふしくた様なお侍様方。お連様かいな。さあれば。お三人共怖顔して。イヤコレ女郎達。我々は天星殿に用事有て参つた。暫座を立て貰ひたい。其様な事で有そな物。由良様奥へ行ぞ。お前も早うお出。皆様是にへ。由良之助殿。矢間十太郎でござる。竹森喜太入でござる。千崎彌五郎御意得に参つたお目覚まされませう。是は打揃ふてよお出なされた。何と思ふて。鎌倉へ打立時候はいつ比でござるな。さればこそ。大事の事をお尋なれ。丹波興作が歌に。歌江戸三界へいかんして。ハ、ハ、ハ、ハ。御免候へたはいく。ヤア酒の酔本性違はず。性根が付ずば三人が。酒の酔を醒さしませうかな。ヤレ聊爾なされまするな。憚ながら平右衛門めが。一言申上げたい義がござります。暫くお控下されませう。由良之助殿。寺岡平右衛門めてござります。御機嫌の體を拜しまして。いぢ計大悦に存奉ります。フウ寺岡平右衛門とは。エ、何てえすか。前かと北國へお飛脚に往かれた。足のかるい足輕殿か。左様でござります。殿様の御切腹を北國にて承はりまして。南無三寶と宙を飛んで歸ります道にて。御家も召上られ。一家中散々と。承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ。御恩替らぬお主の怨。師直めを一討と鎌倉へ立越。三ヶ月が間非人と成て附狙ひましたれ共。敵は用心嚴敷。近寄事も叶ひませず。所詮腹掻割かんと存じました。國元の親の事を思ひ出して。すごく歸りました。所に。天道様のお知らせにや。孰も様方の一味連判の様子承はりますと。ヤレ嬉しや有がたやと。取る物も取敢ず。あなた方の旅宿を尋。一向お頼申上ましたれば。出かした愛奴じや。お頭へ願ふてやろとお詞に縋り。是迄推参仕りました。師直屋敷の。アこれく。ア其許は足輕では無ふて。大きな口がるじやの。何と牽頭持なされぬか。尤もみたくしも。蚤の頭を斧で割た程無念な共存じて。四五十人一味を拵へて見たが。アあぢな事の。よう思ふて見れば。仕損じたら此方の首が轉り。仕課せたら跡で切腹。何方でも死なねばならぬ。といふは人參有て首縊様な物。殊に其元は五兩に三人扶持の足輕。お腹は立られ

な。はつち坊主の報謝米程取て居て。命を捨て敵討せうとは。そりや青海苔貰ふた禮に。太々神樂を打様な物。我等知行千五百石。貴様と比ると。敵の首を斗升で量る程取ても釣合ぬ。所て止た。ナ聞へたか。兎角浮世は斯した物じや。つゝてんく。詞何ぞと引かけた所は堪らぬ。是は由良之助様のお詞共覺ませぬ。僅三人扶持取拙者めでも。千五百石の御自分様でも。繋ました命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押に押れぬは御家の筋目。殿の御名代もなされます。歴々様方の中へ。見る影もない。私めが。指加へてとお願申すは。憚共慮外とも。實の猿が人真似。お草履を擲て成共。お荷物を擔て成共參じませう。お供に召連れられて。ナ。申し。コレ。申し。申し。是はしたり寢てござるそふな。コレサ平右衛門。可惜口風ひかすまい。由良之助は死人も同前。矢間殿。千崎殿。モウ本心は見へましたか。申合せた通計ひませうか。いか様。一味連判の者共への見せしめ。いざ何れもと立寄を。ヤレ。地暫くと平右衛門押有傍に寄。詞つく。思ひ廻しますれば。主君にお別れなされてより。怨を報はん。と様々の難難。木にも茅にも心を置き。人の讒無念をば。確と耐てござるからは。酒でも無理に參らずば。是迄命も續ますまい。地醒ての上の御分別と。無理に押へて三人を。伴ふ一間は善惡の。燈を照す障子の内影を隠すや。三重月の。地入山科よりは一里半息を切たる嫡子力彌。内を透して正體なき父が寢姿。起すも人の耳近しと枕元に立寄て。響に代る刀の鏗音。鯉口ちやんと打鳴せば。むつくと起てサア力彌か。詞こい口の音響せしは急用有てか密に。只今御臺かほよ様より。急のお飛脚密事の御狀。外に御口上はなかつたか。敵高師直歸國の願ひ叶ひ。近々本國へ罷歸る。委細の義は御文との御口上。よし。其方は宿へ歸り。夜の内に迎の駕往け。地はつと猶豫隙もなく。フシ山科指して引返す。地先づ様子氣遣と狀の封じを切所へ。調大星殿。由良殿。斧九太夫でござる。地御意得ませうと聲懸られ。詞是は久しや。一年も逢ぬ内。寄たぞや寄たぞや。類に其皺のばしにお出か。ア。爰な薙破りめが。イヤ由良殿。大功は細瑾を顧ずと申すが。人の讒も構はず遊里の遊び。大功を立る基。逆の大丈夫末頼もし

う存する。ホラ、是は堅いはく。石火矢と出掛た。去とは措れい。イヤ由良之助殿とばけまい。誠貴殿の放埒は。敵を討術と見へるか。おんでもない事。忝ない。四十に餘つて色狂ひ。馬鹿者よ。氣違よと。笑はれふかと思ふたに。敵を討術とは九太夫殿。ホ、ウ嬉しいく。スリヤ其元は。主人鹽治の怨を報ずる所存はないか。けもない事く。家國を渡す折から。城を枕に討死といふたのは。御臺様への追従。時に貴様が。上へ對して朝敵同然と。其場をついと立た。我等は跡に。しやちばつて居た。いかる白痴の。所て仕廻は付ず。御臺へ參つて切腹と。裏門からこそく。今此安樂な樂みするも貴殿のお庇。昔の好は忘れぬく。堅みを止て碎けおれく。いか様此九太夫も。昔思へば信太の狐。妖顯はして一献酌ふか。サア由良殿。久敷ぶりだお盃。又頂戴と會所めくのか。指しおれ呑むは。呑みおれ指は。てうど請おれ。地看をするはと傍に有合ふ鯨看。挟んでフシずと指出せば。調手を出して足を戴く鯨看。地忝いと戴て喰はんとする。手をじつと捉へコレ。調由良之助殿。明日は主君鹽治判官の御命日。取分速夜が大切と申すが。見事其看貴殿は喰ふか。喰るく。但し主君鹽治殿が。鯨に成られたと云便宜が有たか。エ愚痴な人では有るこなたやおれが浪人したは。判官殿が無分別から。スリヤ恨こそ有れ精進をする氣微塵もごあらぬ。お志の看賞翫致すと。地何氣もなく。只一口に味ふ風情。邪智深き九太夫もフシ呆て詞もなかりける。調投此看では呑ぬく。鶏しめさせ鍋焼させん。其元も奥へお出。女郎共誦へくと。足元もしどろもどろの浮拍子。ツレテック。地おのれ未社共。めれんになさで置べきかと騒に。まきれ入にける。地始終を見届驚坂件内。二階より降り立。調九太夫殿子細とつくと見届申した。主の命日に精進をさへせぬ根性で。敵討存じも寄らず。此通り主人師直へ申聞。用心の門を開かせませう。成程最早御用心に及ばぬ事。コレサまだ爰に。刀を忘れて置ました。ほんに誠に大馬鹿者の證據。嗜の魂見ましよ。擬錆たりな赤鯨。ハ、ハ、ハ、ハ。彌本心顯れ御安堵く。ソレ九太夫が家來迎の駕籠。地はつと答て持出る。調サア件内殿お召なされ。先。御自分は老體ひらにく。フシ然らば御免と乗移る。

調イヤ九太殿。承はれば此所に。勘平が女房が勤て居ると聞きました。貴殿には御存ないか。九太夫殿。地／＼といへど答へずコハ不思議と。駕の簾を引明れば。内には手ごろの庭の飛石。コリヤ。調どうじや九太夫は松浦さよ姫をやられたと。地見廻すこなたの縁の下より。調コレ／＼件内殿。九太夫が駕籠脱の計略は。最前力彌が持参せし書翰が心元なし。様子見届跡より知らさん。矢張我等が歸る體にて。貴殿は其駕籠に引添て。地合點／＼と點頭合。駕籠には人の有體に。フシ見せて徐々立歸る。フシ折に二階へ勘平が妻のおかるは酔醒し。はや里馴れて吹風に。フシ憂を晴して居る所へ。調ちよと往て来る。由良之助共有ふ侍が。大事の刀を忘れて置た。遂取て来る其間に掛物もかけ直し。爐の炭もついて置きや。ア、それ／＼。こちらの三味線踏折まいぞ。是はしたり。九太は往なれたさうな。歌父よ母よと泣聲聞ば。妻に鸚鵡のうつけし言の葉。エ、何じやいな。措しやんせ。フシ傍見廻し。由良之助。釣燈籠の灯を照し。讀む長文は御臺より敵の様子細々と。女の文の跡や先。フシト／＼で捗どらず。地餘所の戀よと羨しくおかるは上より見おろせど。夜眼遠眼なり字性もおぼろ。思ひ付たる延べ鏡。出して寫して讀取文章。下家よりは九太夫が。繰下す文月影に。透し讀とは。神ならずほどけかりしおかるが玉笄。ばつたり落れば。下にははつと見上て後へ隠す文。縁の下には猶ゑつぽ。上には鏡の影隠し。調由良さんか。おかるか。そもじは其處に何してぞ。わたしやおまへに盛潰され。餘まりつらさに酔ままし。風に吹れて居るわいな。ムウ。ハテなふ。よう風にふかれてじやの。イヤかる。ちと咄したい事が有。屋根越の天の川で。爰からは言れぬ。一寸おいて給もらぬか。咄したいとは頼たい事かへ。まあそんな物。廻つて来やんしよ。いや／＼。段梯子へおりたらば。中居が見付て酒にせう。ア、どふせうな。ア、コレ／＼。幸爰に九つ梯子。地是を踏へておりてたもと。フシ小屋根に掛れば。調此梯子は勝手が違ふて。ヲ、怖どふやら。危険物。大事な／＼。あぶないこはいは昔の事。三間つつ跨げても。赤かうやくも入らぬ年ばい。阿房いはんすな。船に乗た様で怖わいな。道理で船玉様が見へる。ヲ、覗かんすないな。洞庭の秋の月様を

をがみ奉るじや。イヤモウそんなら下りやせぬぞ。下りざおろしてやる。アレ又悪い事を。喧しい生娘かなんぞの
 様に。地逆縁ながらと後よりじつと抱ッし締抱おろし。詞なんとそもじは御覽じたか。アイいゝへ。見たてであろく。
 アイなんじややら面白そふな文。あの上から皆讀だか。ヲ、くど。ア身の上の大事とこそは成にけり。何の事じやぞ
 いな。何の事とはおかる。古いが惚た。女房に成てたもらぬか。措んせ虚言じや。サ虚言から出た眞でなければ根が
 透ぬ。おふと言や。イヤ言ふまい。なぜ。お前のは空から出た眞じやない。實から出た嘘じや。おかる受出そふ。
 エ、うそでない證據に。今宵の内に身受せう。ムウいやわしには。間夫が有なら添してやる。そりやまあ眞かへ。
 侍冥理。三日成共國ふたら夫からは勝手次第。ハア、嬉しいござんすといはして置いてわらをての。いや直に亭主に
 金渡し。今の間に埒さそふ。氣遣せずと待て居や。そんなら必待て居るぞへ。金渡して来る間。何地へも往きやる
 な。女房じやぞ。夫もたつた三日。それ合點。忝うござんす。歌世にも因果な者ならわしが身じや。可愛男にい
 せの思ひ。エ、なんじやいな措しやんせ忍び音に鳴小夜千鳥。地奥で謠ふもフシ身の上とおかるは。思案取々の。
 地折に出合ふ平右衛門。妹でないか。マア兄様か。地恥かしい所て逢ましたと顔を隠せば。詞苦しうない。關東よ
 り戻りがけ。母人に逢て委しく聞た。夫の爲お主の爲、よく賣れた出かしたく。地をふ思ふて下さんすりやわしや
 嬉しい。詞したがまあ悦んで下さんせ。思ひがけなう今宵受出さるゝ筈。夫は重疊。何人のお世話で。お前も御存の
 大星由良之助様のお世話で。何じや由良之助殿に受出される。夫は下地から馴染か。何のいな。此中より二三度酒の
 相手。夫が有らば添してやる。隙が望しくば隙やると。結構過た身請。扱は其方を。早の勘平が女房と。イエしらず
 じやぞへ親夫の恥なれば。明して何の言ませう。ムウすりや本心放埒者。お主の怨を報する所存はないに極つたな。
 イエ、これ兄様。有ぞへ。高うは言れぬコレ。地斯様くと耳語ば。詞ムウすりや其文を慥に見たな。残らず
 讀だ其跡で。互に見合す顔と顔。それからじやらつき出して遂身請の相談。アノ其文残らず讀だ跡で。アイナ。ムウ。

それで聞えた。妹とても遁れぬ命。地自共に呉れよと拔打にはつしと切れば。詞ちやつと飛退。コレ兄様。わしには何誤り。勘平といふ夫も有。急度二親有からはな様の儘にも成るまい。地請出されて親夫に。逢ふと思ふがわしや樂み。どんな事でも誤らふ。赦して下んせ赦して。手を合すれば。平右衛門拔刃を捨て、フシどうど伏し悲歎の涙にくれけるが。詞可愛や妹何にもしらぬな。親與市兵衛殿は六月二十九日の夜。人に切れてお果なされた。ヤアそれはまあ。コリヤまだ悔りすな。請出され添ふと思ふ勘平も。腹切て死だはい。地ヤアくくそれはまあほんかいの。コレのふくと取付てわつと計りに泣沈む。詞ヲ、道理く。様子咄せばながい事。お痛はしいは母者人。言出しては泣。思ひ出しては泣。娘かるに聞いたら泣死するである。必言ふてくれなのお頼。言まいと思へども。逆も通れぬそちが命。其譯は。忠義一途に凝固つた由良之助殿。勘平が女房と知らねば請出す義理もなし。元來色には猶耽らず。見られた狀が一大事請出し差殺す。思案の底と髓に見へた。よしそふなうても壁に耳。外より洩ても其方が科。密書を覗見たるが誤り殺さにやならぬ。人手に懸きよより我手に掛け。大事を知つたる女。妹とて赦されずと。夫を功に連判の。數に入てお供に立ん。地小身者の悲しさは人に勝れた心底を。見せねば數には入られぬ。聞て命をくれ死んでくれ妹と。事を分たる兄の詞。おかるは始終暖上く。便のないは身の代を。役に立ての旅立ち。暇乞にも見へそな物と。恨でばかり居りました。勿體ないが父様は非業の死でもお年の上。勘平殿は三十に成やならず死ぬのは嘆悲しかる口惜かる。逢たかつたで有ふのに。なぜ逢せては下さんせぬ。親夫の精進さへしらぬはわたしが身の因果。何の生て居りませう。お手にかゝらば噓様が。お前をお恨なされましょ。自害した其跡で。首なりと屍骸なりと。詞功に立なら功にさんせ。地さらばでござる兄様と言つゝ刀取上る。詞やれましてしばしと。地止むる人は由良之助。はつと驚く平右衛門。おかるは放して殺してと。あせるを押へてホウ。詞兄弟共見上た疑ひはれた。兄は東の供を赦す。妹は存在て未來への追善。サア地其追善は冥途の供と。もぎ取刀をしつかと持添。詞夫

勘平連判には加へしかど。敵一人も討とらず。未来て主君に言譯有まじ。其言譯はコリヤ爰にと。地ぐつと突込疊の隙間。下には九太夫肩先縫はれて七願八倒。詞それ引出せの。地下知より早く縁先飛おり平右衛門。朱に染た體をば無二無三に引摺出し。ヒヤア九太夫め。ハテよい氣味と引立て。目通りへ投付れば。起立せもせず由良之助。髭を掴んでぐつと引寄。鬨獅子身中の蟲とは汝が事。我君より高知を戴。莫大の御恩を着ながら。敵師直が犬と成て有事ない事よう内通ひろいだな。四十餘人の者共は。親に別れ。子に離れ。一生連添女房を君傾城の勤をさするも。亡君の怨を報じたさ。寢覺にも現にも。御切腹の折柄を思ひ出しては無念の涙。地五臟六腑をフシ絞りしぞや。取分今宵は殿の速夜。口に諸々の不淨を言ても。慎に憤を重る由良之助に。よう魚肉を突付たなア。否と言れず應といわれぬ胸の苦しさ。三代相恩のお主の速夜に。咽を通した其時の心。どの様に有ふと思ふ。五體も一度に惱亂し。十四の骨々も碎る様に有たはやい。地エ、獄卒め魔王めと。土に摺付捻付て無念の涙に暮けるが。詞コリヤ平右衛門。最前鐙刀を忘れ置たは。こいつをば鬪殺しといふしらせ。命取らずと苦痛させよ。地畏つたと拔より早く踊上り飛上り。切れ共僅二三寸。明所もなしに疵だらけ。紆打廻つて。詞平右衛門殿。おかる殿。地詫てたべと手を合せ。以前は足輕づれなりと。目にも掛ざる寺岡に。フシ三拜するぞ見苦しき。詞此場で殺さば言譯むづかし。喰酔た體にして。地館へ連よと羽織打被せ疵の口。隠れ聞たる矢間千崎竹森が。障子ぐはらりと引開。詞由良之助殿。一段誤り入ましてござります。それ平右衛門。喰酔た其客に。加茂川でフシ水糝を喰せいハアツ往け。

第八 道行旅路の嫁入

浮世とは。誰が言初て。フシ飛鳥川。ふちも知行も瀬と代り。寄邊も浪の下人に。結ぶ鹽治の誤は。戀の柳杭加古川の。娘小浪が言號結納も。とらず其儘に振捨られし物思ひ。地母の思ひは山科の聲の力彌をちからにて住家へ押

て嫁入も。世に有なしの義理遠慮、此つれず乗物も。廢て親子の二人連。フシ都のへ空に心ざす。フシ雪の肌も。寒空は。寒紅梅の色添て。手先覺えず凍へ坂。薩睡峠にさしかゝり見返れば不二の煙の。空に消行衛もしれぬ思ひをば。晴す嫁入のフシ門火ぞといはふて三保の松原につどく。並松街道を狭しと打たる行列は。誰としらねどへ浦山し。ア地世が世ならあのごとく。一度の晴と花かざり。伊達をするがの府中過。城下。過れば氣散じに。フシ母の心もいそぐと。二世の盃濟て後。閨のフシ腔言私語。親知らず子しらずと。葛の細道。纏れ合。フシ嬉しからうと手を引ば。アノ地母様の差合を脇へこかして鞠子川。うつ山邊の現にも。殿御初の新枕。せとの染飯強いやら。聴かしいやら嬉しいやら案じて胸も大井川。水の流と人心。若や心は替らぬか。日陰に花は咲ぬかと。フシいふて島田の憂晴し。フシ我身の上を。斯とだに。人しらすかの橋越て行ば吉田や赤坂の。招く女の聲揃へ。歌縁を結ばし清水寺へ参らんせ。音羽の瀧にさんぶりぎ毎日そふいふて拜まんせそふじやいな。しゝきがんかうがかいれいにうきう。神樂太鼓に。ヨイコノエイこちの晝寝を覺された。都殿御に逢ふてつらさが語りたや。ソウトモく若も女夫とかく様。ならば伊勢さんの引合せ。歸フシ俗歌も。身に取て。好い吉相になる海瀉。熱田の社あれフシかとよ。七里の渡し帆を上げて臍拍子揃へてヤツシツシ。柁取音は。鈴虫かいや。蟋蟀。鳴や霜夜と詠たるは。小夜更てこそくれ迄と。限り有船急がんと母が走れば娘も走り空の霰に笠覆ひ。フシ船路の友の。跡や先庄野鶴山せきとむる。伊勢と吾妻の別れ道。驛路の鈴の鈴鹿越。間の土山雨が降水口の葉に。言囃す。石部石場で大石や。小石拾ふて我夫と撫つ擦りつ手に据て。頓て大津や三井寺の。麓を越て山科へ程なき里へ三重へ急ぎ行く。

第九

地風雅でもなく。洒落でもなく。しやうことなしの山科に。由良之助が佗住居。祇園の茶屋に昨日から雪の夜明し

朝戻り。牽頭中居に送られて酒が。ほたへる雪轉し雪はこけいで雪フシこかされ。仁體捨し遊びなり。詞旦那申し旦那。お座敷の景好ござります。お庭の藁に雪持てトなつた所。とんと繪に豎た通り。けうといじやないかのふお品。サア此景を見て。外へは何地へも往きたうござりますまいがな。へツ朝夕に見ればこそ有れ住吉の。岸の向ひの淡路島山といふ事しらぬか。自慢の庭でも。内の酒は呑ぬ。エ、通らぬやつ。サア。奥へ。地奥はどこにぞお客が有と。先に立て飛石の。詞もしどろ足取もしどろに。見ゆる酒機嫌。お戻りそふなと女房のお石が輕う汲んで出る茶屋の茶よりも氣の端香。お寒からふと格氣せぬ詞の鹽茶フシ醉醒し。地一口吞て跡打明。詞エ、奥無粋なぞやなぞや。折角面白ふ酔た酒醒せとは。ア、ア、降たる雪かな。詞いかに餘所の和郎達が無格氣とや見給ふらん。地それ雪は打綿に似て飛で中入となり。詞奥はかく様といへばとつと世帯染といへり。地加賀の二布へお見廻の。詞遅いは御用捨。伊勢海老と盃。穴の稻荷の玉垣は。朱ふなければ信がさめると云様な物かい。ライこれ。こぶら反りじや足の太指折た。おつとよし。地次手にかうじやと。足先で。ア、詞これはたへさしやんすなへ嗜しやんせ。酒が過るとたはいがない。地ほんに世話でござらふのとフシ物和かに待遇ふ。地力彌心得奥より立出。詞申し。母人。親父様は御寝なつたか。地是上られいと指出す親子が所作を塗分ても。下地は同じ桐枕。ヲ、應は夢現。イヤ。詞最う皆往にやれ。ハイ。そんならば旦那へ宜う。地若旦那些御出を目遣ひて。フシ往に際惡ふ歸りける。地聲聞えぬ迄行過させ。由良の助枕を上げ。詞ヤア力彌。遊興に事寄丸めた此雪。所存有ての事じやが何と心得たぞ。ハツ雪と申す物は。降時には少しの風にも散り。軽い身でござりませう共。彼の如く一致して丸まつた時は。嶺の雪吹に岩をも碎く大石同然重いは忠義。其重い忠義を思ひ丸めた雪も。餘り日數を延過してはと思召ての。イヤ。由良の助親子。原郷右衛門など四十七人連判の人數は。皆主なしの日陰者。日陰にさへ置は解ぬ雪。せく事はないと云ふ事。爰は日當り奥の小庭へ入れて置け。螢を集め雪を積も學者の心長き例。女共。切戸内。

から明てやりやれ。地堺の狀認ん。詞飛脚が來たらばしらせいよ。アイく。地間の切戸の内。雪轉し込戸を立る
 襖引立入にける。地人の心の奥深き山科の隠れ家を。尋て爰に來る人は。加古川本藏行國が女房となせ。道の案内の
 乗物を傍に待せ只一人。刀脇指さすがげに行義亂さず。フシ庵の戸口。詞頼ませうくといふ聲に。地堺はづして飛
 て出る。昔の奏者今のりん。フシどうれと言もつかふと成。詞ハツ大星由良之助様お宅は是かな。左様ならば。加古
 川本藏が女房となせでござります。誠に其後は打絶ました。些とお目に掛りたい様子に付違々参りましたと。傳ら
 れて下されと。地言入させて表の方。フシ乗物はへと昇寄させ。地娘爰へと呼出せば。谷の戸明て鶯の梅見付たる
 微笑顔目深に。被たる帽子の内。詞アノ力彌様のお屋敷は最ふ爰かへ。フシわしや恥かしいと媚かし。地取散す物片
 付て。先お通りなされませと。下女が傳へる口上に。詞駕の者皆歸れ。地御案内頼ますといふもいそく娘の小浪。
 フシ母に付添座に直れば。地お石しとやかに出向ひ。詞是はく。お二方共ようぞや御出疾よりお目に掛る筈。お聞
 及びの今の身の上。地お尋に預りお恥かしい。詞あの改まつたお詞。お目に掛るは今日初めなれど。先達て御子息力
 彌殿に。娘小浪を云號致したからは。お前なりわたしなり。地姫同士御遠慮に及ばぬ事。詞是はく。痛入御挨拶。
 殊に御用繁い本藏様の奥方。寒空といひ思ひがけない御上京。となせ様は兎もあれ。小浪御寮。噂都珍らしからふ。
 祇園清水知恩院。大佛様御覽じたか。金閣寺拜見あらば好傳が有ぞへと。地心置きな挨拶に。只あいくも口の内。
 フシ帽子まばゆき風情なり。地となせは行義改めて。詞今日参る事餘の義にあらず。是なる娘小浪云號いたして後。
 御主人鹽治殿不慮の義に付。由良之助様。力彌殿。御在所も定かならず。地移り換るは世の慣習。替らぬは親心兎や
 角と聞合せ。詞此山科にござる申承りました故。此方にも時分の娘早うお渡し申したさ。近比押付けがましいが。夫
 も参る筈なれど仕に隙のない身の上。此二腰は夫が魂。是を指ば則ち夫本藏が名代と。わたしが役の二人前。由
 良之助様にも御意得まし。祝言させて落付たい。地幸今日は日柄もよし。御用意成されフシ下されませと相述る。

聞きこ是こゝは思おもひも寄よぬ仰おほせ。折お悪わるう夫そ由よし良ら之の助すけは他た行ぎやう。去きながら。若し宿しゆくに居ゐましてお目めに掛かり申まさふならば。御ご深しん切けつの段だん千せん萬まん忝かたじけなう存ぞんじます。云い號ごう致いたした時ときは。故こ殿だん様さまの御ご恩おんに預あづかり。御ご知ち行ぎやう頂たう戴たい致いたし罷まかり在ある故ゆゑ。本ほん藏ざう様さまの娘むすめ御ごを貰もらひませう。然しからば呉くれれうと。云い約やく束そくは申ましたれ共ども。只ただ今いまは浪なみの人ひと。人ひと遣やひまして迎むかへませう。如何いかに約やく束そくならば迎むかへませう。大だい身しんならば古こ川がわ殿だんの御ご息そく女によ。世せ話わに申ます挑てん燈とうに釣つり鐘かね。釣つり合あぬは不ふ縁えんの基もと。ハテ結むす納なを遣やはしたと申ますではなし。どれへ成なりと外ぐわい々々へ。御ご遠とほ慮りょなう遣やはしれませと申まさるゝでござりませうと。地ぢ聞きてはつとは思おもひながら。アノ詞ことばまあお石いし様さまのおつしやる事こと。いかに卑ひ下げなされう迎むかへませ。本ほん藏ざうと由よし良ら之の助すけ。身み上うへが釣つり合あぬとな。そんならば申ましませう。手て前まへの主人しゆじんは小せう身しん故こ家か老らうを勤つとむ本ほん藏ざうは五ご百ひやく石こく。鹽えん治ぢ殿だんは名な大だい。御ご家か老らうの由よし良ら之の助すけは千せん五ご百ひやく石こく。すりや本ほん藏ざうが知ち行ぎやうとは。千せん石こく違ちがふを合あてて云い號ごうはなされぬか。只ただ今いまは御ご浪なみの人ひと。本ほん藏ざうが知ち行ぎやうとは皆みな違ちがふてから五ご百ひやく石こく。イイヤ其そのお詞ことば違ちがひます。五ご百ひやく石こくは扱あ置まつ。一い萬まん石こく違ちがふても。心こころと心こころが釣つり合あへば。大だい身しんの娘むすめも嫁よめに取とるまい物ものでもない。ムム、こりや聞き所ところお石いし様さま。心こころと心こころが釣つり合あぬとおつしやるは。どの心こころじやサア聞きふ。主しゆ人じん鹽えん治ぢ判はん官くわん様さまの御ご生せい害がい。御ご短たん慮りょとは云いながら正せい直ちくを元もととする御ご心しんより發はりし事こと。それに引ひ替か師し直ちくに金きん銀ぎんを以もつて媚めい諂たんふ。追お從しやう武ぶ士しの祿ろくを取とる本ほん藏ざう殿だんと。二に君きみに仕つかへぬ由よし良ら之の助すけが大事だいじの子こ。地ぢ釣つり合あぬ女によ房ぼうは持もたされぬと。聞きも敢あへず膝ひざ立た直ちくし。詞ことば諂たんひ武ぶ士しとは誰たれが事こと。様さま子こに依よては聞き捨すてられぬをを救すくすが娘むすめの可か愛あいさ。夫そに負おるは女によ房ぼうの常つね。地ぢ祝しゆ言げん有あふが有あまいが。云い號ごう有あるからは天てん下げ晴はるての力りき彌やが女によ房ぼう。ムム、詞ことば面めん白はくい。女によ房ぼうならば夫そが去さる。力りき彌やに代かて此こ母ははが去さた。地ぢとは言い放はなし。心こころ隔への唐から紙かみをフしはたと。引ひ立た入いにける。地ぢ娘むすめはわつと泣な出でし。折せ角かく思おもひ思おもはれて云い號ごうした力りき彌や様さまに。逢あせて遣やらしめしたお詞ことばを便べんに思おもふて來きた物ものを。姑こ御ごのどう欲よくに。詞ことば去さらる覺おぼはわたしやない。地ぢ母はは様さまどふぞ詫わ言げんして。祝い言げんさせて下くださりませと紐ひもり敷ふけば母はは親おやは。娘むすめの顔かほをつくづくと。打うち跳はし。親おやの欲よく目めかしらね共ども。ほんに其その方かたの美み容ようなら。十じ人にん並ならんども勝かつた娘むすめ。好このい聲こゑをがなと詮せん議ぎして云い號ごうした力りき彌や殿だん。尋たづねて來きた甲か斐ひもなう。聲こゑにしらさず去さたとは。義ぎ理りにも言いはれぬお石いし殿だん。姑こ去さはば心こころ得えぬ。ムム、詞ことば復ふ

は浪人の身の縁邊なう筋目を言立。有徳な町人の聲に成て。義理も。法も忘れたな。ナフ小浪。今言ふ通の男の性根去つたといふを而當欲しがる所は山々。外へ嫁入する氣はないか。コレ大事の所泣ずとも確りと返事仕や。地コレどふじや。どふじやと。尋る親の氣は張弓。アノ母様の胸欲な事おつしやります。國を出る折父様のおつしやつたは。浪人しても大星力彌。行儀といひ器量といひ。仕合な聲を取た。貞女兩夫に見す。聲夫に別れても又の夫を設なよ。主有女の不義同前。必々寢覺にも殿御大事を忘るゝな。由良之助夫婦の衆へ孝行盡し夫婦中陸しい迎あじやらにも。格氣ばししてフシ去らるゝな。地案ぜうか迫隠さずと懷妊に成たら早速に。しらせて呉れとおつしやつたをわたしや能う覺えて居る。去れて往んで爺様に苦に苦を懸てどふ言てどう言譯が有ふ共。力彌様より外に餘の殿御。わしやいやいと一筋にフシ戀を立ぬく心根を。地聞に絶兼母親の。涙一途に突詰し。覺悟の刀拔放せば。母様は何事と押留られて顔を上。詞何事とは曲がない。今もそなたが言通り。一時も早う祝言させ。初孫の顔見たいと。娘に甘いは爺の習ひ。地悦んでござる中へまだ祝言もせぬ先に。去れて戻りました連どふ連て往なれふぞ。といふて先に合點せにやフシ仕様もやうもないわいの。地殊にそなたは先妻の子。わしとはなさぬ中じや故およそにしたかと思はれては。どふも生ては居られぬ義理。此通を死た跡で爺御へ言譯したもや。詞アノ勿體ない事おつしやります。殿御に嫌はれわたしこそ死すべき筈。地生てお世話に成上に苦を見せまする不孝者。母様の手にかけてわたしを殺して下さりませ。去れても殿御の内爰で死れば本望じや。早う殺して下さりませ。詞ヲ、ヲよう言やつた出かしやつた。そなた計殺しはせぬ。此母も三途の供。そなたをおれが手に懸て。母も追付跡から行覺悟は宜いかと立派にも。涙留めて立掛り。詞コレ小浪。アレあれを聞きや。表に虚無僧の尺八。鶴の巢籠。地鳥類てさへ子を思ふに科もない子を手に懸るは。因果と因果の寄合と。思へば足も立兼て。震ふ拳を漸に。振上る刀の下。尋常に座を占手を合せ。詞南無阿彌陀佛と。地唱る中より御無用と。聲懸られて思はずも。緩し拳尺八も。フシ俱に。ひつそと静まりしが。ヲ、

問そふじや。今御無用と止たは。虚無僧の尺八よな。助たいが山々で。無用といふに氣おくれし。未練なと笑はれな。
 地娘覺悟はよいかやと又振上る又吹出す。とたんの拍子に又御無用。ム、又御無用と止たは。修行者の手の内か。
 振上た手の中か。イヤお刀の手の中御無用。勲力彌に祝言させう。エ、そふいふ聲はお石様。地そりや眞實か誠かと
 尋る襖の内よりも。あひに相生の。松こそ目出度かりけれと。地祝儀の小謠白木の小四方。フシ目八分に携へ出。詞
 義理ある中の一人娘。殺さふと迄思ひ詰たとなせ様の心底。小浪殿の貞女。志が最愛さ。爲せにくい祝言さす。其
 代。世の常ならぬ嫁の。盃。請取は此三方。フシ御用意あらばと指置ば。地少しは心休りて拔たる刀鞘に納め。詞世
 の常ならぬ盃とは。引出物の御所望ならん。此二腰は夫が重代。刀は正宗。指添は浪の平行安。家にも身にも替ぬ
 重寶。是を引出と皆まで言さず。詞浪人と侮つて價の高い二腰。まがかの時に賣拂へと。言ぬ計の掣引出。御所望申
 すは是ではない。ム、そんなら何が御所望ぞ。此三方へは加古川本藏殿の。お首を乗て貰たい。エ、そりや又何故な。
 御主人治鹽判官様。高の師直にお恨有て。鎌倉殿で一刀に切懸給ふ。其時こなたの夫加古川本藏。其座に有て抱留。
 殿を支た計に御本望も遂られず。敵は漸薄手計り。殿はやみく御切腹。口へこそ出し給はぬ。其時の御無念。
 本藏殿に憎しみが懸るまいか。有まいか。家來の身として其加古川が娘。あんかんと女房に持様な力彌じやと。思ふ
 ての祝言ならば。此三方へ本藏殿の白髮首。否とあらばどなたでも。首を並る尉と颯。それ見た上て盃させう。サ
 サアア否か。地應かの返答をと。尖き詞の理屈詰。親子ははつとフシ指俯向途方に。暮し折柄に。詞加古川本藏が首
 進上申す。お受取なされよと。地表に控へし薦僧の。笠脱捨て徐々と内へ這入は。ヤア詞お前は爺様。本藏様。地爰
 へどふして此形は。合點がいかにぬ是りやどふじやと咎る女房。ヤア詞難々と見苦し。始終の子細皆聞た。そち達に
 しらすず爰へ來た様子は追て。先黙止。其元が由良之助殿御内證お石殿よな。今日の時宜斯あらんと思ひ。妻子にも
 知らせず。様子を窺ふ加古川本藏。案に違はず拙者が首。掣引出に欲いとな。ハ、ハ、ハ、否はやそりや侍のいふ

事。主人の怨を報はんといふ所存もなく。遊興に耽り大酒に性根を亂し。放埒成身持日本一の阿房の鏡。蛙の子は蛙に成。親に劣らぬ力彌めが大白痴。狼狽武士のなまくら銅。此本藏が首は切ぬ。馬鹿盡すなと踏碎く。破三方のふち放れ。此方から聲に取ぬちよこざいな女めと言せも果すやア。詞過言なぞ本藏殿。浪人の鐙刀切れるか切ぬか鹽梅見せう。不祥ながら由良の助けが女房。地望む相手じやサア勝負くくくと楯引上。長押に懸たる鐙追取。突かゝらんず其氣色。是は短氣なマア待てと止隔つる女房娘。邪障ひろぐなとあらけなく。右と左へ引退る。間も有せず突かくる。鐙のしほ首引攔。振つて拂へば身を背け。諸足縫んと閃かす。双楯を蹴て蹴上れば。拳放れて取落す。地鐙奪はれじと走寄腰際帶際引攔。どふど打付動かせず膝に引敷強氣の本藏。敷れてお石が無念の切齒。親子はあゝフシ危む中へ。地驅出る大星力彌。捨たる鐙を取る手も見せず本藏が。馬手の肋弓手へ通れと突通す。うんと計にかつばと伏す。コハ情なやと母娘取付。歎くに目も懸ず。止め刺んと取直すやア。調待力彌早まるなど。地鐙引留て由良之助手負に向ひ。詞一別以來珍らしし本藏殿。御計略の念願届き。聲力彌が手に係つて。嘸本望でござらふのと。地星を指たる大星が。詞に本藏目見開き。詞主人の鬱憤を晴さんと此程の心遣ひ。遊所の都合に氣を緩ませ。徒黨の人数は揃ひつらん思へば貴殿の身の上は。本藏が身に有べき筈。當春鶴が岡浩營の砌。主人桃井若狹助。高師直に恥しめられ。以の外憤り。某を密に召れまづかうくの物語。明日御殿にて出喰せ。一刀に討留ると。思ひ詰たる御顔色。地留ても留らぬ若氣の短慮。詞小身故に師直に。賄賂薄きを根に持て。恥しめたると知たる故主人に知らせず不相應の金銀衣服臺の物。師直へ持參して。心に染ぬ諂ひも主人を大事と存るから。賄賂課せ彼方から誤つて出た故に。切に切れぬ拍子拔。主人が恨もさりと晴。地相手代て鹽治殿の。難義と成たは則其日。詞相手死なずば切腹にも及ぶまじと。抱留たは思ひ過した本藏が。地一生の誤りは娘が難義としらがの此首聲殿にフシ進せたさ。詞女房娘を先へ登し。媚諂ひしを身の科にお暇を願ふてな。道を替てそち達より二日前に京着。若い折の遊藝が益に立た

四日の内。こなたの所存を見抜た本藏。手に懸れば恨を晴し。約束の通此娘。力彌に添せて下さらば未來永劫御恩は忘れぬ。コレ 詞手を合して頼入。地忠義にならては捨ぬ命。子故に捨る親心推量有れ由良殿といふも涙に咽返れば。妻や娘は有にもあられず。實に斯とは露しらず死おくれた計に。お命捨るはあんまりな。冥加の程が恐ろしい。赦して下され父上とかつばと伏して泣叫ぶ。地親子が心想像。大星親子三人も。フシ俱に萎れて居たりしが。地ヤアく本藏殿。詞君子は其罪を悪んで其人を惡まずといへば。縁は縁恨は恨と。格別の沙汰も有べきにと無恨に思はれん。が所詮此世を去る人。底意を明けて見せ申さんと。地未前を察して奥庭の障子さりと引明れば。雪を束て石塔の五輪の形を二つまで。造立しは大星が。フシ成行果を顯せり。地となせは賢しく。詞ム、御主人の怨を討て後。二君に仕へず消るといふお心のあの雪。力彌殿も共心で娘を去つたの胸欲は。御不便餘つてお石様。恨んだがわしや悲しい。となせ様のおつしやる事。玉棒の八千代まで共祝はれず。後家に成嫁取た。地此様な目出度悲しいフシ事はない。詞斯云事がいやさに。酷難面いふたのが。嚔憎かつたでござんしよなふ。イ、エイナ、わたしこそ腹立ま。町人の聲に成て義理も法も忘れたかといふたのが。恥かしいやら悲しいやらどふも顔が上られぬお石様。となせ様。氏も器量も勝れた子何として此様に。地果報拙い生れフシやと聲も。涙に咳上る。地本藏熱き涙を押へ。ハツアア嬉しや本望や。詞吳王を諒て誅せられ。辱を笑ひし吳子胥が忠義は取に足らず。忠臣の鑑とは唐土の豫讓。日本の大星。昔より今に至る迄。唐と日本にたつた二人。地其一人を親に持。力彌が妻に成たるは。女御更衣に供るより。百倍勝つてそちが身は武士の娘の手柄者。手柄な娘が聲殿へ。お引の目録進上と懷中より取出すを。力彌取て押戴き扱見ればコハいかに。目録ならぬ師直が屋敷の案内一々に。玄關長屋侍部屋。水門物置柴部屋まで繪圖に委しく書付たり。由良之助はつと押戴き。詞へツエ有難しく。徒黨の人数は揃へ共。敵地の案内知れざる故。發足も延引せり。此繪圖こそは孫吳が秘書。我爲の六韜三略。地兼て夜討を定たれば。繼梯子にて塀を越し忍び入には縁側の。雨

戸外せば直に居間。爰を仕切て斯攻てと。フシ親子が悦び。地手負ながらもぬからぬ本蔵。詞イヤ／＼夫は辭言ならん。用心厳しき高の師直。障子襖は皆尻ざし。兩戸に合栓合櫃。抉ては外れず大槌にて。毀たば音して用意せんかそれいかゞ。地ヲ、夫にこそ術あれ。詞凝ては思案に能はずと遊所よりの歸るさ。思ひ寄たる前栽の雪持竹。兩戸をはずす我が工夫。地仕様を爰にて見せ申さんと庭に折しも雪深くさしに強き大竹も雪の重さに。ひいわりとしはりし竹を。引廻して鴨居に嵌。雪に撓は弓同然。詞此如く弓を拵へ弦を張。鴨居と敷居に嵌置て。一度に切て放時は。地まづ此様にと積つたる枝打拂は雪散て。伸るは直なる竹の力。鴨居撓て溝はづき。障子残らずばた／＼。本蔵苦しき打忘れハ、アしたり／＼。詞計略といひ義心と云ひ。個程の家來ながら了簡も有べきに。地浅き工みの鹽治殿。口惜き振廻やと。悔を聞くに御主人の御短慮なる御仕業。今の忠義を戰場のお馬先にて盡さばと。思へば無念に閉塞がる。胸は七重のフシ門の戸を洩るは涙計なり。地力彌は徐々下立て父が前へ手をつかへ。詞本蔵殿の寸志により。敵地の案内知つたる上は。泉州堺の天川屋儀平方へも通達し。荷物の工面仕らんと聞も敢ず何さ／＼。山科に有事隠れなき由良之助。人數集めは人目有。一先堺へ下つて後あれから直に發足せん。其方は母嫁となせ殿諸共に。跡の片付諸事萬事何も彼も。心残りのなき様に。ナ。ナ。コリヤ。地あすの夜舟に下るべし。我は幸ひ本蔵殿の忍姿を我姿と。袈裟打掛て編笠に。恩を戴く報謝がへし未來の迷ひ晴さん爲。地今宵一夜は嫁御寮へ。舅が情の戀慕流し。地歌口示して立出れば。兼て覺悟のお石が歎き。御本望をと計にて名殘惜しさの山々を言ぬ心のフシいちらしさ。地手負は今を知死期時。爺様申しと様と。呼と答へぬだんまつま。親子の縁も玉の緒も切れて一世のフシ憂別れわつと泣母泣娘。俱に死骸にむかひ地の。回向念佛は戀無常。出行足も立留り。六字の御名を笛の音に。詞南無阿彌陀佛。地なむあみだ是や尺八煩惱の枕並ぶる追善供養。聞の契は一夜限。心残して三重へ立出る。

第十

地津の國と和泉河内を引請て。餘所の國まで舟寄る三國一の大湊。堺といふて人の氣も賢しき町に疵もなき。天川
 屋義平、湊金から金を設溜。見かけは輕く内證は重い暮しに重荷をば。手づから見世で締括り大船の船頭。詞是て丁度
 七棹。地請取ましたと指荷ひ。行も黄昏亭主はほつと。日和もよし好い出船と。言つゝ煙草烟管筒。フシ吸付にこそ
 入にけれ。地家の世繼は今年四つ傳は十九の丸額。親方よりも我が遊び。詞サア始りじや。面白し事。泣辨
 慶の信太妻。東西。フシ爰に哀を止しは。此よし松に止めたり。詞元來其身は父計。母は去られて。往なれたて。
 フシ泣辨慶と申すなり。コリヤ詞伊五よ。最ふ人形廻しいや。噂さんと呼てくれいやい。ソレ其様に無理言しや
 ると。旦那さんにいふて此方さんも追出さすぞ。跡の月からお釜が割て。手代は手代で鼠の子か何ぞの様に。目が明
 んといふて追出し。飯焚は大きな欠したといふて隙遣り。今ではこなはんと。わしと旦那はんと計。どうて此内を脱
 走するのかし。ちよこ。舟へ荷物が行。飄落するなら人形箱持て往ふぞや。イヤ人形廻しよりおりや最ふ寢た
 い。アレ最ふおれ迄を喰す程にの。宜こざるはおれが抱て寢てやる。いやじや。何故に。われには乳がない物おり
 やいやじや。アレ又無理言しやる。こなたが女の子なら。乳よりよい物が有けれど。何をいふても相掣同士。フシ是
 も涙の種ぞかし。地折節表へ侍二人誰頼ふ義平殿はお宿にかと。云ふも潜く内からつこと。詞旦那様は内に。我等
 人形廻していそがしい。詞用があらば這入た。イヤ案内致さぬも無禮。原郷右衛門大星力彌。密に御意得たいと
 申ておくりやれ。何じや腹へり右衛門。大飲喰彌。こりや堪らぬ。アレ旦那様大きなけなないどが見へましたと。地叫
 ぶよし松引連てフシ奥へ入ば。地亭主義平。詞又阿房めがしやなり聲と。地言つゝ出て。詞エ、郷右衛門様力彌様。
 サアまゐ。是へ。地御免有と座を占て郷右衛門。詞段々貴公のお世話故萬事相調ひ。由良之助もお禮に參る筈なれ共。

鎌倉へ出立も、明日。何かと取込、力麿を名代として失禮のお断り。是はく御念の入た義、急に御發足とござりますれば。何角お取り込でござりませうに。成程、郷右衛門殿の仰の通り、明早々出立の取込。自由ながら私に参りお禮も申し。又お頼申した跡、荷物も、彌々今晩で積仕廻か。お尋申せと申渡しましてござります。成程お誂への彼道具一まき。段々大廻して遣し。小手躰當小道具の類は。長時に仕込以上七竿。今晚出船を幸、船頭へ渡し。残るは忍び挑燈鎖鉢巻。是は陸荷で跡より遣す積りでござります。郷右衛門様お聞なされましたか。いかのお世話でござります。いか様主人鹽治公の御恩を請けた町人も多くござれ共、天河屋の義平は。武士も及ばぬ男氣な者と。由良殿が見込大事をお頼申されたも尤。併、鑓長刀は格別。鎖帷子の纏拂子のと申す物は常ならぬ道具。お買なさるゝに不思議は立ませなんだかな。イヤ其義は。細工人へ手前の所は申さず。手附を渡し、金と引替に仕る故。何處の誰と先様には存ませぬ。成程尤、次手に力彌めもお尋申ましよ。内へ道具を取込、荷物の拵、御家來中の見る目はどふしてお忍びなされましたな。ホウ夫も、御尤のお尋。此義を頼まれますと。女房は親里へ歸し。召使は垂邪を付て。段々に隙遣はし。残るはあほうと四ツになる筋。洩る筋はござりませぬ。扱々驚入ましてござります。其旨を親共へも申聞して安堵させませう。郷右衛門殿お立なされませぬか。いか様出逢に心急ます。義平殿お暇申ませう。然らば由良之助様へも、宜しう申聞しませう。おさらば。地さらばと引別れ。フシ二人は旅宿へ立歸る。地表閉んとする所へ此家の舅太田了竹。詞ヲツトしめまい宿にかと。地ずつと通てきよろく眠。詞是は親仁様ようこそお出。扱此間は女房そのを養生がてら遣はし置。嘸お世話お薬でも給ますかな。ア薬も吞まする食も喰ます。夫は重疊。イヤ重疊でござらぬ。手前も國元に居た時は。斧九太夫殿から扶持も貰ひ相應の身體。今は一僕さへ召使はぬ所へさしてもない病氣を養生さしてくれよと指越れたは。子細こそあらん。カ夫はとも有れ。生若い女不埒が有ては貴殿も立ず。身共も鐵腹でも切ねばならぬ。所て一つの相談、先世間は隙やり分。暇の狀をおこして置て。ハテ何時でも爰

の勝手に。呼戻す迄の事。たつた一筆遂書て下されと。地輕う云ふのも物工。一物有と知りながら。否といはゞ女房を直に戻さん戻りては。頼まれた人々へ詞も立ずと取つ置つ思案する程。詞否かどふじや不得心なら此方にも。片時置れず戻すからは此了竹も躑込。へたばつて俱に厄介否か應かの返答と。地込付られて追の義平。工に乗が口惜やと。思へどこちらの一大事見出されてはと懸視。取て引寄せら〜と。フシ書認。詞是やるからは了竹殿親でなし子でなし。重て足踏お仕やんな。底工ある暇の状。弱身を喰ふてやるが残念。持て行きやれと投付れば。地手早く取て懷中し。ヲ、詞よい推量。聞ば此間より浪人共が入込ひそめくよりそのめに間共しらぬとぬかす。何仕出さふも知れぬ。娘を添して置が氣遣ひ。幸左る歴々から貰ひ掛られ。去狀取ると直に嫁入さする相談。一杯參つて重疊〜。ホウ警去狀なき迎も子までなしたる夫を捨。外へ嫁入する性根なら心は残らぬ勝手〜。ヲ、勝手にするは親のこうけ。今宵の内に嫁らす。ヤア細言吐ずと早歸れと。地肩先擱て門口より。外へ蹴出して跡びつしやり。這々起て。詞コリヤ義平。なんぼ擱て擱出して。嫁らす先々仕拵へ金。温まつて蹴られたりや。どふやら疝氣が直つたと。地口は達者に足腰を撫つ擦りつ逃ほへに。呟き〜立歸る。地月の曇に影隠す隣家も寢入亥の刻過。此家を目懸て捕手の人數十手早繩腰挑燈。火影を隠して窺ひ〜犬と思しき家來を招。耳打すれば指心得門の戸劇しく打叩く。誰じや。〜も及び腰のイヤ。詞宵に來た大船の船頭でござる。船賃の算用が違ふた。一寸明て下され。ハテ仰山な。僅な事である明日來た〜。イヤ今夜受ける船。仕切て貰はにや出されませぬと。地いふも聲高近所の聞えと。義平は立出何心なく門の戸を明ると其儘捕た〜。動くな上意と追取巻。コハ何故と四方八方。眼を配れば捕手の兩人。ヤア。詞何故とは横道者。儕儕治判官が家來大星由良の助に頼まれ。武具馬具を買調へ大廻しにて鎌倉へ遣す條。急ぎ召捕拷問せよとの御上意。遁れぬ所じや腕廻せ。是は思ひも寄ぬお答。左様の覺聊かなし。地定て夫は人違ひと。いはせも立ず。詞ヤアぬかすまい。争はれぬ證據有。ソレ家來共。はつと心得持來るは。宵に積だる堯庭荷の長持。

見るより義平は心も空。ソレ動かすなと四方の十手。其間に荷物を切解き。長持明けんとする所を。飛懸つて下部を蹴退。蓋の上にどつかと座り。ヤア 調籠忽千萬。此長持の内に入置たは。去る大名の奥方より。お誂へのお手道具。お具足櫃の笑ひ本。笑ひ道具の注文迄其名を記置たれば。明さしては歴々のお家のお名のお出る事。御覽有てはいづれもお身の上にも懸りませうぞ。ヤア 彌胡亂者。中々大抵では白狀致まい。それ申し合せた通。地合點でござると一間へ驛入。一子よし松を引立出。調サア義平。長持の内は兎も有れ。鹽治浪人一黨に固り。師直を討つ密事の段々。儼能知りつらん。有やうに言ばよし。言ぬと忽ち忤が身の上。地コリヤ是を見よと拔刀。稚き喉に指付られ。はつとは思へど色も變ぜず。調ハ、女童を責る様に。人質取ての御詮議。天河屋の義平は男でござるぞ。子に羈され存ぜぬ事を存じたと心得申さぬ。曾て何にも存ぜぬ。知らぬ。知らぬといふから金輪ならく。憎しと思はど其筋。我が見る前て殺したく。テモ胴性骨の太い奴。管鑊鐵炮鎖帷子四十六本の印まで調へ遣たる儼が。知らぬといふとて言して置ふか。白狀せぬと一寸様。一分刻に刻むが何と。ヲ、面白く刻れう。武具は勿論。公家武家の冠烏帽子。下女小者が藥沓迄。買調へて賣が商人。そり不思議迎御詮議あらば。日本人に人種は有まい。一寸ためしも三寸縄も。商賣故に取るゝ命。惜いと思はぬ。サア殺せ。筋も目の前突けく。地一寸様は腕から切か胸から裂か。肩骨背骨も望次第と。指付突付我が子をもぎ取。子に羈されぬ性根を見よと。絞殺すべき其吃相。調ヤレ聊爾せまい義平殿。暫と長持より。地大星由良之助良金。立出る體見て悔り。捕手の人々一時に。十手取縄打捨て。フシ遙下つて座を占る。地威義を正して由良之助義平に向ひ手をつかへ。調扱々驚入たる御心底。地泥中の蓮。砂の中の金とは貴公の御事。さあらん左もそふづと。見込て頼んだ一大事。此由良之助は徹摩聊お疑ひ申さね共。調馴染近付てなき此人々。四十人餘の中にも。天河屋の義平は生來の町人。今にも捕へられ詮議に逢は。如何あらん何とか言ん。殊に寵愛の子も有れば。子に迷ふは親心と評議區々案じに胸も休まらず。地所詮一心の定めし所を見せ。古傍輩の者

共へ安堵させん爲。爲まじき事とは存ながら右の仕合。驚忽の段は眞平く。調花は櫻木。人は武士と申せ共。地い
つかなく武士も及ばぬ御所存。百萬騎の強敵は防共。左程に性根は据ぬ物。貴公の一心を借請我々が手本とし。敵
師直を討たば賢巖石の中に籠り。鐵洞の内に隠るゝともやはか仕損じ申すべき。調人有る中にも人なしと申せ共。
町家の中にあれば有物。地一味徒黨の者共の爲には。生宮共氏神共尊み奉らずんば。御恩の冥加に盡果ませう。調靜
謐の世には賢者も顯はれず。へエ、惜い哉悔い哉。地亡君御存生の折ならば。一方の簾大將。一國の政道お預け申し
た逆惜からぬ御器量。調是に並ぶ大鷲文吾矢間重太郎を始め。小寺高松堀尾板倉片山等。潰し眼を開かする。地妙藥
名醫の心魂。有がたしくと逡巡て三拜人々も。無骨の段眞平と疊に頭を摺付る。ヤレ調夫は迷惑。お手上られて
下さりませ。惣體人と馬には。乗て見よ添て見よと申せば。お馴染ない御旁は氣遣に思召も尤。私元は輕い者。お
國の御用承はつてより。經上つた此身代。判官様の御様子承はつて俱に無念。何卒此恥辱雪やうはないかと。り
きんで見ても秦龜のぢだんだ。及ばぬ事と存じた所へ。由良之助様のお頼。こそ心得たと向ふ見す。俱にお力付る
計。地情ないは町人の身の上。手一合ても御扶持を戴ましたらば。此度の思し立。袖袂に取付て成共お供申。いづ
れも様へ息つぎの。茶水でも汲ませうに。調夫も叶はぬは。よく町人は淺猿しい物。是を思へばお主の御恩。刀
の威光は有がたい物。地それ故にこそお命捨らるゝ。御羨しう存じまする。猶も冥途で御奉公。お序に義平めが。志
もお執成と厚き詞に人々も。思はず涙催して奥齒嚙割計なり。地由良之助取敢ず。調今晚鎌倉へ出立。本望遂るも
百日とは過すまじ。承はれば御内證迄省き給ふ由重々のお志。追付夫も呼返させ申さん。地御不自由も今暫く。
フシ早お暇と立上る。地ヤレ申さば目出度立旅。何れも様へも御酒一つ。調否夫は。ハテ扱祝ふて手打の蕎麥切。ヤ
手打とは吉相。然らば大鷲矢間御兩人は跡に残り。先手組の人々は。郷右衛門力彌を誘ひ。佐田の森迄お先へ。地い
ざ此方へと亭主が案内。お辭義は無禮と由良之助二人を伴ひ入月と。フシ又出る月と。二つ輪の親と夫との中に立。

おそのは一人小挑燈聞き思ひもフシ子故の闇。あやなき門を叩き。詞伊五よくと呼聲が。地寝耳にふつと阿房は驅出。詞おれ呼だは誰じや。化粧の者か。迷ひの者か。イヤそのじや爰明てくれ。さふいふても氣味が悪い。必ずばあといふまいぞと。地言つゝ門の戸押開き。エ、詞おゑさんかようごんしたの。一人歩行すると。ナ病犬が噛ぞへ。ヲ、犬に成共噛れて死だら。今の思ひは有まいに。おりや去れたわいいやい。どんな事に成んしたなア。旦那殿は寢てか。イ、エ。留主か。イ、エ。何の事じやぞやい。何の事やらわしも知らぬが。宵の口に猫が鼠を取たかして。捕たゝと大勢来たが。ちやつとおれは蒲團被つたれば遂寢入た。今其和郎達と奥で酒盛。ざんざやつてござんす。ハテ合點のいかそふうしてぼんは寢たか。アイ是はよう寢てござんす。旦那殿と寢たか。イ、エ。われと寢たか。イ、エ。遂一人轉りと。なぜ伽して寢さしてくれぬ。夫でもわしにも旦那様にも。乳がないといふて泣てばつかり。ヘエ、可愛やそふである。地夫ればつかりが實の事とフシわつと泣出す門の口。空にしらせぬ雨の足フシ乾く袂もなかりける。詞ヤイ／＼伊五めどこに居ると。地呼立出る主の義平。アイ／＼爰にと驅入跡。尻目に懸て白痴めが。詞奥へ往て給仕ひろげと。地呵り追遣門の戸を。さすを押。詞コレ旦那殿。言事がある爰明て。地イヤ聞事もなし言事も。内證一つの畜生め。穢はしい其處退ふ。詞イヤ親と一所でない證據。それ見て疑晴てたべと。地戸の際よりも投込一通。拾取間に附込女房。夫は書物一目見て。詞コリヤ最前遣た暇の狀。是戻してどふするのじや。どふするとは聞えませぬ。親子竹の悪工は。常からよう知ての事。譬の様な事有連。何故隙狀を下んした。地持つ戻ると嫁らすと思ひも密ぬ拵へ。嬉しい顔で油斷させ鼻紙袋の去狀を。盗てわしは外て來ました。お前はよし松可愛くないか。去てあの子を繼母に。掛る氣かいの胸欲など。總り歎けば。ヤア。詞其恨は逆捻。此内を往なす折。言含たを何と聞た。様子有て其方に隙遣てなし。暫の内親里へ歸つて居よ。舅了竹は。元九太夫が扶持人。心地解ねば子細は言はぬ。病氣の體に待し。起臥も自由にすな。櫛も取なと言付遣たをなぜ忘れた。詞散亂髪て居る者を。嫁に

娶ろとは言ぬはやい。如何のおれがよし松が可愛かる。詞畫は一日あほうめが。欺し賺せど夜になると。噓様／＼と尋居るかゝは追付。最ふ爰へと。地だまして寢させど能寢入ず。呵て寢さそと儼付。怖顔すりや聲上ず。詞しくしく泣て居るを見ては。筋節が碎て堪らるゝ物じやない。地是を思へば親の恩。子を持て知るといふ。不孝の罰と我身をば。悔んで夜と共にフシ泣明す。詞昨夜も三度抱上て。最ふ速て往こ。抱て往と。門口迄出たれども。一夜でたんのうするでもなし。五十日隙取るやら。百日隔て置ふやら。知れぬ事に馴染しては。跡の難義と。五町三町。地震振あるいて儼付。寢さしては。徐と轉し。我が肌付れば現にも。乳を探してしがみつ。僅な間の別れでさへ。戀焦るゝ物一生を。引分けふとは思はぬ共。詞是非に及ばず暇の状。了竹へ渡せしを。内證にて請取ては。親の許さぬ不義の科。快らず持て歸れ。是迄の縁。約束事。死だと思へば事濟むと。地切離よき男氣は。常を知るフシ程猶悲しく。詞此家に居るとお前が立ず。内へ往ぬると嫁入にやならず。地悲しい者はわたし一人。詞是が別れに成らふも知れぬ地よし松を起してちよつと逢して下さんせ。イヤ詞それはならぬ。今逢ふて今別るゝ其身。跡の思ひが猶不便な。地分て今宵はお客も有。くど言ずと早くお行きやれ。それでも一寸よし松に。ハテ詞扱未練な。跡の難義を思はずやと。地無理に引立去狀も。俱に渡して門先へ心強くも突出し。詞子が可愛くば了竹へ。佗言立て春迄も。團龍ひ貫はど思案もあらん。地それ叶はずは限りと門の戸閉て。フシ内に入。地ノウ夫が叶ふ程なれば。此思ひはござんせぬ。難面いぞや我夫。詞科もない身を去のみか。我子に迄逢さぬは。あんまり醜胸欲な。地顔見るまでは何ぼでも。往なぬゝと門打叩き。詞情じや。慈悲じや。爰明て。地寢顔成共見せて給べ。コレ手を合せ拜ます。むごいわいのとどふと伏しフシ前後不覺に泣けるが。地ハア恨むまい歎くまい。詞慈かに顔見たら。母様かと取付て。離しもせまいし離れも成まい。地今宵往れば今宵の嫁入。明日まで待たれぬわしが命。さらばでござるさらばやと。言ふては戸口へ耳を寄。若や我が子が聲するか。顔でも見せて呉るか。窺ひ聞と音もせず。ハア是非もなや是迄と思ひ切

て驅出す向ふへ。目計出した大男道を塞て引扱。是はといふ間も情なやすらりと拔て嶋田齋。根よりふつと切取て懷までを引浚へ。何方共なく逃行しフシ無法無息ぞ是非もなき。地ノウ憎や腹立や。何者かむごたらしう髪切て。書た物迄取て往んだ。櫛笄の盗人なら。いつそ殺してくと泣叫ぶ聲に驚き義平は思す驅出しが。ハア爰が男の魂の。亂口よと喰しばり。猶豫中に奥よりも。詞御亭主。〳。義平殿と立出る由良之助。詞段々御深切の御馳走。お禮は鎌倉より申越さん。猶跡荷物物の義。早飛脚を以てお頼申。夜の明ぬ内早お暇。いか様今暫共申されぬ刻限。道中御堅勝て。御吉左右を相待ます。着致さば早速。書翰を以てお知らせ申そふ。返すくも此度のお世話。詞てお禮は言盡されませぬ。ソレ矢間大驚。御亭主へ置土産。はつと文吾十太郎。扇を時の白臺と載て出たる一包。詞是は貴公へ是は又。御内室おその殿へ。地些少ながらとフシ指出す。義平はむつと顔色替り。詞詞で言れぬ禮と有ば。イヤコレ禮物受うと存じ。命がけのお世話は申さぬ。町人と見侮り。小判の耳で面張るのか。イヤ我々は婆婆の暇。貴殿は残る此世の宿縁。御臺かほよ御前の義もお頼申さん爲。地寸志計と言殘し。フシ表へ出れば猶むつと。詞性根魂を見違へたか。踏付た仕方あた忌々し。地穢はしと包し進物蹴飛ばせば。包ほどけて内よりばらり女房驅寄。コレ詞是はわしが櫛笄。切れた髪。ヤア〳〳〳此一包は去狀。ホイ扱は最前切たのは。ホウ此由良之助が。大驚文吾を裏道より廻らせ。根よりふつと切した心は。いかな類でも尼法師を。嫁らそふ共言まいし。嫁に取者は猶有まい。其髪の延る間も凡百日。我々本望遂るも百日は過ぎ。討讓せた後目出度祝言。其時には櫛笄。其切髪を添に入。地并。番の三國一先づ夫迄は尼の乳母。詞一季半季の奉公人。其肝煎は大驚文吾。同矢間十太郎。地此兩人が連中へ大事は洩ぬといふ請判。由良之助は冥途から仲人致さん義平殿。詞ハア、重々のお志お禮申せ女房。地わたしが爲には命の親。イヤ。詞お禮に及ばず。返禮と申すも九牛が一毛。義平殿にも町人ならずば。俱に出立とのお望幸かな。兼て夜討と存れば。敵中へ入込時。貴殿の家名の天河屋を直に夜討の合詞。天と懸なば河と答へ。地四十餘の者

共が。天よ。河よと申すなら。詞貴公も夜討にお出も同然。義平の義の字は義臣の義の字。平はたいらか頼く本望。地早お暇と。立ち出る末世に天を山といふ。由良之助が孫奥の術。忠臣蔵とも言はやす。娑婆の言葉の定めなきわか。別れて 三重出て行。

第十一

地柔能剛を制し弱能強を制するとは。張良に石公が傳へし秘法なり。鹽治判官高定の家臣。大星由良之助是を守つて。既に一味の勇士四十餘騎獵船に取乗て。苦深々と稻村が崎の油斷を フシ頼にて。岸の岩根に漕寄て。先一番に打上るは。大星由良之助義金。二番目は原郷右衛門。第三番目は大星力彌。跡に續て竹森喜多八片山源太。先手跡舟段々に列を亂さず立出る。奥山孫七須田五郎。着たる羽織の合印。いろはには フシへと立並ぶ。地勝田早見遠の森。音に聞えし片山源五。大鷲文吾かけやの大槌引提。詞吉田岡崎ちりぬるを。わか手は小寺立川甚兵衛。不破前原深川彌次郎。地得たる半弓手挟て。上るは川瀬忠太夫 フシ空に耀く。大星瀬平。よたれ。そつねならむうゐの。奥村岡野小寺の嫡子。中村矢嶋牧平賀やまけふこえて。朝霧の フシ立並たる芦野や菅野。詞千葉に村松村橋傳治。鹽田赤根は長刀構へ。中にも磯川十文字。遠松杉野三村の次郎。木村は用意の繼梯子。千崎彌五郎堀井の彌惣。同彌九郎遊所の酒にゑひもせぬ。由良之助が智略にて八尺許の大竹に。弦を懸てぞ持たりける。後陣は矢間十太郎。遙跡より身を卑下し。出るは寺岡平右衛門假名實名袖印 フシ其數四十六人なり。地鎖袴に黒羽織忠義の胸當打揃ふ。實に忠臣のかな手本義心の手本義平が家名。詞天と河との合詞忘るな兼ての言合せ。矢間千崎小寺の面々。筋力彌を始とし表門より入く。郷右衛門と某は。裏門より込入て。地相圖の笛を吹ならば時分はよしと乗込よ。取べき首は只一つと。由良之助に下知せられ怒の眼一時に。館を遙に脱付裏と表へ。三重、別れ行。フシ斯とはしらず。地高

武藏守師直は由良之助が放埒に心も緩む油斷酒。藝子遊女に舞謡はせ。藥師寺を上客にて身の程しらぬ大騒。果は
 雜混寢の不行儀に前後もしらぬ寢入ばな。非常を守る番人のフシ拍子木のみぞ残りけり。地表裏一度に手筈を極め矢
 間千崎ふ敵の二人。表門に忍寄り内の様子を窺へば。夜廻りと思しき拍子木速音をさせば能折と。例の嗜む綱梯子。
 高塀へ打懸く雲井までもと蜘蛛の上り誤せた塀の屋根。早拍子木の近付音片々と下るを見付し番人。スハ何者と飄
 寄を取て引伏せ高手小手。能案内と息を留繩先腰に引懸て。拍子木華ひかツちかち。役所くを打廻り。覗ひ廻るぞ
 フシ不敵なる。地早裏門に呼子の笛。時分は好と兩人は。拍子木合せて天河と。貫の木外して大門をくはらりと開け
 力彌を始め。杉野木村三村の一黨我もくと込入て。見れば一面雨戸の固め父が教へし雪折は。爰ぞと下知して丸竹
 に弦を懸たを雨戸の鴨居。敷居に挟んで一時に。一二三つの拍子にて懸たる弦を丁切ば。鴨居は昂り敷居は降り雨
 戸外れてばたくく。そりや乗込と天河のフシ聲響かして亂入。スハ。地夜討ぞと松明挑燈裏門よりも込入て。一
 方へ郷右衛門一方は由良之助。床几に掛つて下知をなす。小勢なれ共寄手は今宵必死の勇者。秘術を盡せば由良之助
 詞餘の者に目な懸そ。只師直を討取れと。地郷右衛門諸共に八方に下知すれば。はやりをの若者共揉立く。三重切
 結ぶ。地北隣は仁木播磨守。南隣は石堂右馬之丞。兩隣より何事かと家の棟に武者をフシ上げ挑燈星のごとくに
 て。詞ヤアく御屋敷騒動の聲太刀音矢叫び事騒がしく。狼藉者か盜賊か。地但し非常の沙汰なるか。承はり届よ
 と。主人申付られしとフシ高らかに呼はつたり。地由良之助取敢ず。詞是は鹽冶判官が家來の者共。主君の怨を報は
 ん爲。四十餘人の者共が千變萬化の戦ひ。斯申すは大星由良之助原郷右衛門。尊氏御兄弟へお恨なし。元來兩隣仁
 木石堂殿へ何の遺恨も候はねば。卒爾致さん様もなし。火の用心は堅く申付たれば。是以て御用心に及ばぬ事。只穩
 便に捨置れよ。夫迎も隣家の事聞捨ならず加勢あらば。力なく一矢仕らんと高聲に答たり。地兩家の人々聞届
 御神妙く。我人主人持たる身は尤斯こそ有べけれ。御用あらば承はらん挑燈引けと一時に。フシ靜返つて控へけ

る。地一ト時計の戦ひに寄手は僅二三人。薄手を負たる計にて敵の手負は數しれず。され共大將師直と覺しき者もなき所に。足輕寺岡平右衛門。館の内を飛廻り。調部屋へは勿論上は天井下は簀子。井の内迄鎧を入れて捜共師直が行衛知れず。寢間と覺しき所を見れば。夜着蒲團の温り。此寒夜に冷ざるは逃て間なしと覺たり。表の方が氣づかしと驅行を。ヤレ平右衛門待てくと。矢間十太郎重行。師直を宙に引立て。コレ何れも。調柴部屋に隠れしを見付出して生捕しと。地聞より大勢花に露いきく勇て由良の助。詞ヤレでかされた手柄く。去ながら迂濶に殺すな。假にも天下の執事職。殺すにも禮義有と。地請取て上座へ据へ。詞我々陪臣の身として。御館へ踏込狼藉仕るも主君の怨を報じたさ。慮外の程御赦し下され。御尋常に御首を給るべしと相述べ。地師直も流石のめせ者。わろびれもせず、尤々。詞覺悟は兼てサア首取れと。地油斷さして拔打にはつしと切る引外して腕捻上。詞ハア、しほらしき御手向ひ。サアいづれも。日比の鬱憤此時と。由良の助は初太刀にて四十餘人が聲々に。浮木に遇へる盲龜は是。三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと。踊上り飛上り筐の刀で首播落し。悦び勇んで舞も有。妻を捨手に引れ老たる親を失ひしも。此首一ツ見ん爲よ今日はいか成吉日ぞと。首を擲て喰付つ一同にわつと嬉し泣理過ぎて哀れなり。地由良の助は懷中より亡君の位牌を出し。床の間の卓に乗奉り。師直が首血汐を清め手向申し。兜に入し香をフシ柱遡巡て。三拜九拜し。地恐ながら。亡君尊靈蓮性院利大居士へ申上奉る。詞去る御切腹の其折から。跡吊へと下されし九寸五分にて。師直が首播落し。御位牌に手向奉る。地草葉の陰にて御請取下さるべしと涙と共に禮拜し。詞いさく一人づつ御焼香。先づ惣大將なれば御自分様より。イヤ拙者より先さきへ。矢間十太郎殿御焼香なされ。イヤ夫は存も寄ず。孰れもの手前と申し。御最負は却て迷惑。イヤ最負でござらぬ。四十人餘の衆中が師直が首取んと。一身を抛中に貴殿一人。柴部屋より見付出し生捕になされたは。能々主君鹽治尊靈の。お心に叶ひし矢間殿。お義しう存る。何といづれも。御尤に存じます。夫は何とも。ハテ捌刻限が延ます。地然らば御免とフシ一

の焼香。地二番目は由良殿。いざ御立と勸むれば。詞イヤまだ外に焼香の致し人有。そりや何者誰人と。地間へば大星懷中より碁盤嶋の財布取出し。詞是が忠臣二番目の焼香。早野勘平がなれの果。其身は不義の誤から一味同心も叶はず。せめては石碑の連中にと。女房賣て金調へ。其金故に舅は討れ金は戻され。詮方なく腹切て相果し。其時の勘平が心無念に有ふ口惜からふ金戻したは由良之助が一生の誤り。不便な最期を遂さしたと。片時忘れず肌放さず。今宵夜討も財布と同道。平右衛門そちが爲には妹嫁。地焼香させよと投遣れば。ハ、ハ、ハ、はつと抑戴き。草集の蔭より嘸有がたう存じましよ。冥加に餘る仕合せと。財布を香爐の上に着せ。詞二番の焼香早野勘平重氏と。地高らかに呼はりし聲も涙に震はすれば列座の人もフシ残念の胸も。張裂計りなり。地思ひがけなや人馬の音。山谷に響く攻太鼓フシ鬨をどつとぞ上にける。地由良之助ちつ共騒がず。詞扱は師直が一家の武士取懸しと覺えたり。地罪作りに何かせんと覺悟の所へ。桃井若狭助後馳に驅付給ひ。詞ヤア。大星。今表門より攻懸たは。師直が弟。師安。此所で腹切ては。敵に恐れしと。後代迄の譏。鹽冶の御菩提所光明寺へ立退べしと。地仰にはつと由良之助。詞いか様最期を遂る共。亡君の墓の前。仰に隨ひ立退申さん。後殿頼上ると。地いふ間もあらせず何處に忍居たりけん。薬師寺次郎鷺坂伴内。おのれ大星遁さじと右往左往に討てかゝる。力彌不疎請流し。詞暫時が内は討しが。はづみを打て討太刀に。地袈裟に掛られ薬師寺最期。交す二の太刀足切られ。尾にもつがれず鷺坂伴内。フシ其儘息は絶にける。地ヲ、手柄々と稱美の詞。末世末代傳ふる義臣是も偏に君が代の。久しき例竹の葉の榮を爰に書殘す。

寛延元年辰八月十四日

作者

竹田出雲
並三好松洛
木千柳

假名手本忠臣蔵終